

2023

文集 **はと笛**



文集
は
と
笛

二〇二三

令和5年度 第54回

弘前市小・中学生読書感想文コンクール

入 選 作 品

弘前市立弘前図書館

弘前市立弘前図書館

文集
はと笛

二〇二三

令和5年度 第五十四回

弘前市小・中学生読書感想文

コンクール入選作品

審査の先生

弘前市立郷土文学館 企画研究専門員
弘前市国語教育研究会
弘前市国語教育研究会
弘前地区小学校学校図書館教育研究会
弘前地区小学校学校図書館教育研究会
弘前地区中学校教育研究会国語部会
弘前地区中学校教育研究会国語部会
弘前地区中学校教育研究会国語部会

櫛引洋一
佐藤信孝
地主尚子
三浦隆史
築館潤子
鈴木敏浩
鈴木篤志
奈良篤志
佐藤史子

(順不同・敬称略)

巻頭言 「ハナたれっ小僧の読む小説」

豆腐屋のチビ公は今田圃の畔を伝つて次の町へ急ぎつつある。爽かな春の朝日が森を離れて黄金の光の雨を緑の麦畠に黄色な菜畑に紫雲英咲く紅の田に降らす。

少年小説「あゝ玉杯に花うけて」の冒頭部です。「あゝ玉杯に花うけて」は、貧乏な苦学生のチビ公こと青木千三が、裕福な家庭に育つた柳光一との友情を深めながら、貧困・いじめ・暴力などの苦難を乗り越え、天下の秀才が集う旧制第一高等学校に入学するまでを描いた『熱血小説』です。雑誌『少年倶楽部』に昭和二年五月から翌年四月まで連載されて熱狂的な反響を呼び、「少年倶楽部」の発行部数は三十万部から四十五万部に飛躍したと言われています。この作品を書いたのは、弘前市出身の作家・佐藤紅緑（明治七年～昭和二十四年）。令和六年、生誕百五十年を迎えました。少年時代の紅緑は、無類の読書家である一方、海賊を夢見る豪傑肌でしたが、東京に出て文才が開花。俳人・正岡子規門下の四天王に数えられ、やがて新聞小説で「当代随一」の人気作家となります。

その紅緑に少年小説の執筆を依頼したのは、同郷の『少年倶楽部』編集長・加藤謙一でした。大人の読む小説で「当代随一」の人気を誇る紅緑は、「このおれにハナたれっ小僧の読む小説を書けというのか」と一喝。しかし、謙一は「先生はハナたれ小僧といわれるが、子どもは国の宝ですぞ」と食い下がり、「あゝ玉杯に花うけて」の連載が実現したのです。

昭和十年代、日本は暗い戦争の時代を迎え、紅緑は小説を書くことをやめ、元気をなくしてしまします。そして敗戦。年の暮れ近いある日、すっかり老人になった紅緑がトポトポと散歩をしていた時、くたびれた兵隊服を着た一人の青年が興奮した面持ちで紅緑に駆け寄ります。「ぼくは先生の愛読者でした。『あゝ玉杯に花うけて』や『英雄行進曲』など、五へんも六へんもくり返して読みました。辛いことがあるたびにあれを思い出して発奮しました。ぼく、一生に一度は先生にお会いして、お礼をいいたいと思います。冬の日射しの中を立ち去って行く青年の後姿を、紅緑はいつまでも見送り、年老いた小さな目から一筋の涙が頬を伝わりました。「ハナたれっ小僧の読む小説」が、苦境に陥った「一人の青年」の心を救い、戦争を乗り越えて前に向かって生きる力を与えたのです。あらためて、〈文学の力〉というものを感じます。

皆さんが今回読んだ一冊も、そのような力を与えてくれたのではないのでしょうか。来年もまた、心を震わせる素晴らしい読書感想文と出会えることを楽しみにしています。

第五十四回 弘前市小・中学生読書感想文コンクール 入選作品

文集はと笛 二〇二三 目次

巻頭言

櫛引洋一

小学校

◎三年の部

- | | | | | |
|-----|----------------------|-----------|------|----|
| 第一席 | 人はそれぞれちがうんだ | 弘前市立福村小学校 | 小沢遥輝 | 9 |
| 第二席 | 十分のしゅくだいと二時間のウソ | 弘前市立和徳小学校 | 後藤碧斗 | 10 |
| 第三席 | 『すてきなひとりぼっち』 | 弘前市立東小学校 | 山本千瑞 | 11 |
| 佳作 | 『5分後に君とまた会えるラスト』を読んで | 弘前市立福村小学校 | 小野穂香 | 12 |
| 佳作 | 『しっぱいにかんぱい!』を読んで | 弘前市立和徳小学校 | 神明李 | 13 |

◎四年の部

- | | | | | |
|-----|-------------------|---------------|------|----|
| 第一席 | 不公平は公平だ | 弘前市立福村小学校 | 石岡実結 | 15 |
| 第二席 | 『コケシちゃん』を読んで | 弘前市立第三大成小学校 | 三政好実 | 16 |
| 第三席 | 縄文時代の子どもたち | 弘前大学教育学部附属小学校 | 中井太陽 | 17 |
| 佳作 | なぜ飛ぶのか知りたかったけれど | 弘前大学教育学部附属小学校 | 鳥飼千歳 | 18 |
| 佳作 | 『のび太』という生きかた』を読んで | 弘前市立福村小学校 | 相馬万生 | 19 |

佳作 筋ジスは和馬君のトロフィーだ 弘前大学教育学部附属小学校 泉 愛菜 20

◎五年の部

第一席 人間は猛獣使い 弘前市立朝陽小学校 三浦 瑛士 22
第二席 みんなの楽しい学校をつくるために 弘前市立文京小学校 古川 隆惺 23
第三席 自由と責任 弘前大学教育学部附属小学校 對馬 朋笑 24
佳作 犬の感情 弘前大学教育学部附属小学校 高杉 宥佑 26
佳作 『リターン！』を読んで 弘前市立北小学校 松山 佑季 27
佳作 自分らしく生きること 弘前市立時敏小学校 伊藤 楓乃花 28

◎六年の部

第一席 幸せなたまご 弘前市立城西小学校 小林 摩幸 30
第二席 『注文の多い料理店』が教えてくれたこと 弘前市立福村小学校 小笠原 香穂 31

第三席 命の大切さ 弘前大学教育学部附属小学校 三浦 一華 32
佳作 イクバルがくれた「勇気」 弘前市立大成小学校 高山 京慧 34
佳作 何かをやりとげるために必要なこと 弘前市立福村小学校 矢田谷 昇太 35
佳作 情報は自分で確かめよう。 弘前大学教育学部附属小学校 成田 歩生 36

中学校

◎一年の部

第一席 世界の分子としての僕 弘前大学教育学部附属中学校 吉田 蒼汰 41
第二席 ラッキーガール夢を跳ぶ 弘前大学教育学部附属中学校 小笠原 琉仁 43

第二席 仲間と走る

弘前市立南中学校

八木橋 颯 45

佳作 たとえ人に馬鹿にされても

弘前大学教育学部附属中学校

長谷川 統也 47

佳作 死んでしまった人に会えたなら

弘前大学教育学部附属中学校

日ヶ久保 乃愛 49

佳作 太宰の生き方に触れて

弘前市立南中学校

齋藤 天菜 51

◎二年の部

第一席 違うへの向き合い方

弘前市立第五中学校

八木 利彩 53

第二席 心のバリアフリー

弘前市立第一中学校

丸岡 胡桃

※本人の意向により作品は掲載していません。

第三席 『アルジャーノンに花束を』

弘前大学教育学部附属中学校

伴 駿斗 55

佳作 過去へタイムスリップ

弘前大学教育学部附属中学校

品川 碧海 56

佳作 『岡本太郎の眼』

弘前市立相馬中学校

石岡 南樹 58

佳作 地球と人類の救世主

弘前市立第一中学校

伊藤 快人 60

佳作 『青春ゲシユタルト崩壊』を読んで

弘前市立南中学校

三戸 愛瑠 62

◎三年の部

第一席 老人と僕

弘前市立東中学校

千葉 晴登 64

第二席 失うこと

弘前大学教育学部附属中学校

佐藤 聡一郎 66

第三席 きよしこの夜

弘前大学教育学部附属中学校

鳥潟 歩美 68

佳作 カラフルな世界

弘前市立第一中学校

齋藤 久歌 70

佳作 溺れゆく前に

弘前市立第二中学校

奈良岡 真里奈 72

佳作 『法律』とは何か

弘前市立南中学校

相馬 一護 74

佳作	わたしはイエロー	弘前市立第四中学校	石戸 たまき	76
佳作	自分の考えを伝えようとする大切さ	弘前大学教育学部附属中学校	山口 青空	78
	応募作品審査講評			81
	努力賞一覧			90
	感想文の対象となった図書			91
	読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移			98
	第54回（二〇二三）読書感想文コンクール応募作品数			98
	令和5年度第54回弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項			99
	編集後記			100

編集にあたって

一、作品の中で使用する漢字は、小学校の場合、それぞれの学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超えるものについてはふりがなをつけました。

中学校の場合は、常用漢字表以外のものについてはふりがなをつけました。

一、感想文のタイトル中に、対象となった作品が掲げられている場合は、作品を示す記号として『』に統一しました。

一、感想文のタイトルにサブタイトルがある場合は、区別する記号として～を付けることで統一しました。

一、感想文のタイトル中に強調の意味で「」が使用されている場合は、””に置き換えました。

一、感想文のサブタイトルに「○○を読んで」とある場合は、これを省略しました。

小
学
校

六 五 四 三
年 年 年 年
の
部

人はそれぞれがうんだ

弘前市立福村小学校 小沢 遥輝

「今日は空の絵をかきましょう」と言われたら、どんな空を思い浮かべますか。

ぼくは、海にはるか遠くまで広がる、雲ひとつないまっ青な空を思い浮かべました。

たぶん、青い空を想像した人が多いと思います。

ぼくが読んだ、『おれは女の子だ』という本の主人公すばるは、絵がとくいで、きれいなものが大好きな男の子です。

すばるは、ピンク色が一番好きなので、空の絵をピンク色でぬりました。それを見たクラスメイトの鈴木くんが「空がピンクなんてへんだ。ピンクなんて女の子みただ。」と言ったので、「先生が見たことのない空の絵をかいてもいいって言ったから、好きな色でぬっているんだ。」とせつめいしました。でも鈴木くんは何どもしつこくからかいます。頭にきたすばるは思わず「そうだよ、おれは女の子だよ。」とせんに言してしまいます。でも、となりのせきの女の子の川崎さんは、すばるの味方になってくれました。

ぼくも、学校の友だちにいやなことをしつこく言われたことを思い出して、いやな気持ちになりました。

次の日、せつかく味方になってくれた川崎さんに、「きれいじゃない」とすばるはひどいことを言って泣かせてしまいます。そのことをお姉ちゃんに話したら、すぐくおこられて女の子の気もちを知るためにスカートをはいて学校へ行かされました。

そして、バカにする人や、かばってくれる人がいて、相手の気もちを想像することが大切だと気づいていきました。

もし、自分のクラスメイトがスカートをはいてきたら、たぶんほかの人がわらってバカにしていたら、ぼくも相手の気もちを考えずにいつしよになつてわらってしまうと思います。でも、この本を読んで、人によって好きなものや考えはちがうのだと気づきました。なかなか人の気もちを考えるのは、むずかしいことだけど、相手の気もちを想像して自分はどう思うからこうだときめつけなくて、思いやりをもって行動

できる人になりたいと思いました。

小学校三年の部 第二席

対象作品／山本悦子作『先生、しゅくだいわすれました』 童心社

十分のしゅくだいと二時間のウソ

弘前市立和徳小学校

後藤 碧斗

ぼくは、『先生、しゅくだいわすれました』という本をえらびました。この本を読もうと思った理由は、しゅくだいって大切なのに、なぜ本のタイトルが「わすれました」となっているのか気になってえらびました。

この本は、ゆうすけ君という男の子が、しゅくだいをわすれたことからじまります。さいしよは、わすれた理由を、だれかがびようきとか、死んじやったというウソをつきました。しかし、先生にすぐにウソがばれてしまいます。先生は、「ウソをつくなら、すぐばれるようなのはだめだよ。もっと、ばれないようなので、それから、聞いた相手が楽しくなるようなのじゃなくちゃ。」と言いました。じょうずにウソをつけるなら、しゅくだいをしなくてもよいと言うのです。次の日にゆうすけ君は、しゅくだいをわすれてきました。その理由は、うちゅう人に算数の九九を教えていたら、いつのまに

か朝になつていたので、しゅくだいができなかつたというのです。それを聞いた先生は、「それじゃあ、しゅくだい、できなくつてもしかたないわね。」とウソの理由でもゆるしました。それから、毎日一人ずつウソの理由を言つて、しゅくだいをわすれてくる人ができます。しかし、まじめにしゅくだいをやりたい人もできて、もめた後、さいごは全いんしゅくだいをやつてきておわりました。

ぼくは、ゆうすけ君の、しゅくだいは十分でおわるのに、ウソを考えるのは二時間もかかつたという言葉が心にのこりました。なぜなら、しゅくだいは十分でおわるのに、ウソの理由を考えるのに二時間もかかるのであれば、しゅくだいをやつたほうがましだと思つたからです。

ぼくは、しゅくだいをわすれたくありません。しゅくだいをやつてくると、気もちがいいからです。ぼくも、前に学校

にしゆくだいをわすれてきてしまったことがあります。その時は、朝に四十分ぐらい早く学校へ行つて、しゆくだいをやったけいけんがあります。その時は、ドキドキしてあまりねむれなかつたし、ふ安になりました。朝、学校でしゆくだいをやっている時も、あせつてうまく計算ができなかつたりと、全ぜんいいことがありますでした。

小学校三年の部 第三席

『すてきなひとりぼっち』

弘前市立東小学校

山本千瑞

対象作品／なかがわちひろ作『すてきなひとりぼっち』のら書店

この本を読んで、ウソをついてしゆくだいをやらないことは、よくないと思いました。しゆくだいは、自分が学校のじゆぎょうで習つたことをおぼえるためにひつようなことだと思つので、これからもしゆくだいをわすれずに、がんばつていこうと思いました。

この本は家ぞくで図書館に行った時、私が見つけてかりてきました。三年生になつて、クラスがえがあり、私は教室で一人ぼっちになる事が多くなりました。この本の題名が、『すてきなひとりぼっち』だったので、私と同じかなと思つてかりてみました。

主人公の男の子は、教室でも帰り道でも一人ぼっちでした。男の子が転んでもだれも気づきません。そのページを読んでかわいそうだと思いました。私が転んだら、みんな気づいて大丈夫と声をかけてくれるからです。

ある日男の子が家に帰ると、カギがかかっていました。その日は雨で帰り道転んで足にけがを負いました。男の子はしやがみこみ、ぼくはずつと一人ぼっちなのかなと思ひました。でも男の子は立ちあがり、町へお母さんをさがしに行きます。私はそのすがたを見て、ゆうかな男の子だなと思いました。町に出ると一びきのカメと出会い、そのカメも一人ぼっちだったので、男の子はカメと一緒にお母さんをさがすことにしました。でも、こんどはまいごになつてしまいます。その時、一人のおばあちゃんが買ったじやがいがいもが転がってしまいま

した。それを男の子がひろってあげます。その時おばあちゃんか男の子のけがやよこれたふくに気がつきません。いつの間にか人が集まっています、もう男の子は一人じゃなくなっていました。お母さんのこともけいさつがつれてきてくれました。お母さんと会えてよかったです、町の人がやさしくてよかったです。夜ごはんは、カレーを家ぞくみんなでここにこしながら食

小学校三年の部 佳作

対象作品／エブリスタ編『5分後に君とまた会えるラスト』河出書房新社

『5分後に君とまた会えるラスト』を読んで

弘前市立福村小学校 小野 穂 香

私は本が好きでよく図書室へ行きます。次はどんな本を読もうかなとさがしている時に、この本を見つけました。表紙の絵がすごく私好みで気になって少し読んでみると、それはせつないラブストーリーで、少しかなしいけど、おもしろい場面もあり、どんどんひきこまれていきました。

この本の中にはいくつものお話が入っていて、私がとくにいんしょうにのこったのは、「きれいなきみとよこれたほくで、えいえんのちかいを交わそう」というお話です。それは

べている絵があつて、デザートは、シュークリームを食べていました。その様子を見て、家では一人ぼっちじゃないんだなど思い、ほっとしました。

私が一番すきな場面は、さいごのページです。その場面は朝でも夜でもないような、月と太陽がでている空です。私はもう男の子は一人じゃないと思いました。私にも家ぞくがいて、友だちがいて先生がいて本当によかったと思いました。

どんなお話かというと、せかいから日々失われる記ねん物といわれる、貴重なそんざいの物を見つけ、していされたところにつうほうすると、しゃれい金がしはらわれるというニュースが流れたことから物語がはじまります。ワニの少年と人魚の少女の、記ねん物同士同士のれんあいがこのお話のテーマです。記ねん物物はつかまると「記ねん物てんじケース」にかざられてしまうのですが、ある日、湖にいた二人が人間にかまりそうになり、ワニの少年は自分がぎせいになつて、人

魚の少女をにがしてあげました。その様子をずっと見ていた少女は、もう一度少年に会いたい一心で、自分から人間に、「自分を少年と同じケースに入れてほしい」とたのみに行きました。そのねがいはかない、二人はずっといつしよにいることができたのです。この少女のせつない思いにわたしはむねがいつぱいになりました。それと、少年がまずはじめに、

自分をぎせいにして人魚の少女を守ったところがいんしょうにのこりました。この少女のせつない思いにわたしはむねがいつぱいになりました。いつかわたしも、「こんなこいがしてみたい」「大切な人を守るようなやさしい人になりたい」と思いました。

小学校三年の部 佳作

『しつぱいにかんぱい!』を読んで

対象作品／宮川ひろ作『しつぱいにかんぱい!』 童心社

弘前市立和徳小学校

神

明 李

わたしは、『しつぱいにかんぱい!』というお話をえらびました。その理由は、このお話がおもしろそうだと思ったからです。

このお話は、主人公のお姉ちゃんのかなが、運動会のリレーでしつぱいしてしまい、おちこんでいるときにおじいちゃんから電話がきて、おじいちゃんの家に来きます。そして、おじいちゃんの家でみんなのしつぱいした話をきいて、すこし元気になったお話です。

わたしの心にくった場面は、よこはまのおじいちゃんが

言った「しつぱいには、いのちにかかわるほどの大きなしつぱいもあるけれど……。しつぱいして大きくなるんだし、ときがたつと、しつぱいがいい思い出になるんだね」という言葉です。なぜなら、わたしも学校でそうじの時に、バケツにいった水をこぼしてクラスみんなにめいわくをかけて先生におこられたことがあります。その時は、みんなにめいわくをかけてとてもおちこみました。けれども、そのしつぱいをしてからは、同じしつぱいをしないように気をつけるようになりました。しつぱいしたときはいやな気持ちになるけれど

も、しつぱいして大きくなるということは、こういうことなのだと思いました。もう一つ心にのこった場面は、いとこの洋が学校でサツカーのまねをしてキックしたら、しようここの口のとびらにあたってあついガラスにひびが入り、こまっっているときにクラスで一番のいたずらの大きくんが、いっしょに先生のところへあやまりにいってくれた話です。なぜなら、いたずらの大きくんがいっしょにあやまりに行こうとしたからです。いたずらばかりしているけれども、友だちがこまっっているときに、すぐにたすけてあげるところがやさしいと思いました。わたしも、友だちがこまっっているときは、たすけてあげたいなと思いました。

わたしは、この本をよんでしつぱいすることがこれからもたくさんあるかもしれないけれども、しつぱいをおそれずにいろいろなことにちょうせんしていきたいと思いました。そして、かなのおじいちゃんやおじさん、おばさんのように自分のしつぱいした話を、わらいながら明るく話せるような大人になりたいと思いました。わたしのおじいちゃんやおばあちゃん、昔のしつぱいした話もきいてみたいと思いました。この本のタイトルの『しつぱいにかんぱい！』というのは、しつぱいから学ぶことがあるので、おいわいする時のように「かんぱい」と言うのだと思いました。

不公平は公平だ

弘前市立福村小学校

石岡実結

この本は私わたしのことが書いてあると思った。私はせが低くて目が悪い。四年になっても、低学年にまちがわれる。小学二年生の時に、目の手じゅつをした。ゲームもやらないし、テレビも見ない。外でも遊ぶし、目に良いと言われる事はやってみた。それなのに手じゅつをしてメガネをかけることになつて、くやしい思いをした。

主人公は、せが低いのがいやで、一日牛乳にゅう一リットルを目標にして飲んでいる。ぎやくに主人公の親友は、けい馬のき手になりたいのにどんだんせが高くなつていくのがなやみだ。主人公は親友から給食の牛乳をもらつて飲んでいる。牛乳を飲んでいるのにチビだと友人にからかわれ、それをかばつたちがう友人の言葉のほうが、「くやしくて、はずかしくてぼくにはきつかった。」と思つている。「せが低いぼくはかわいそうなのか？せが低いつてぎんねんな事なのか？チビだつて言われたらきずつくのか？」こんな事で泣くなつてぜつたいいやだ。みじめすぎる。と思つているのに、目が悪い友人の

ことは、「メガネをかければ遠くだつてバッチリ見えるようになるじゃん」「だけどせは高くなれない」と、し力とせで不公平さのレベルがちがうと考えている。

この考えだと私はせが低いし、目も悪いので、とてもざんねんてかわいそうな子なのかと心の中がモヤモヤした。私も学校で主人公のように、低学年にまちがえられて「公太君はつとむ君より小さいけど、大きい子なんだよ」みたいな事を言われる。主人公は「正気をふりかざしたまつとうな言葉のほうかぼくはきずついた。」と思つている。

せが低いのも目が悪いのも悪い事じゃないのに、言われると心の中がチクチクしてくるのはなぜか考えてみた。小さいころは、せが低くても、目が悪くても仲よしで遊んでいた友だちも、何かちがうなと感じる事がある。良いなど思う事も、いやだなと思うこともふえた。せが低いから、目が悪いからとからかわれる事はないけれど、私にとつてはコンプレックスだ。

この物語には、せが低くてなやんでいる人、せが高くて気にしている人、目が悪い人、色んなコンプレックスを持った人が出てくる。「不公平さは、だれにでも公平にある」と物語の中のおじさんが言った。そうか、なるほど。と思った。コンプレックスは、他の人から見たら気にならないかもしれない。他の人のコンプレックスを私は長所と思っているか

もしれない。私はせが低い人の気持ちも、目が悪い人の気持ちもわかる。不公平だと思ふ事はかんたんだけれど、見かたを変えれば、全部がめぐるまれているよりも、小さな幸せとよるこびを見つけられる力になる。心を大きく広げてみよう。不公平は不幸ではないと気づいて、私の心は晴ればれと軽くなった。

小学校四年の部 第二席

対象作品／佐藤まどか作『コケシちゃん』フレーベル館

『コケシちゃん』を読んで

弘前市立第三大成小学校

三 政 好 実

この本の表紙はとてもかわいくて、私^{わたし}がちようどこけし館に行った後だったので、どんなお話なのかなと思ひ読んでみました。お話の中に、外国と日本のちがいがたくさん出てきておもしろかったです。

京ちゃんは自分の考えをはっきりと言える女の子で、外国語も色々^{いろいろ}話せて、かっこいいなと思ひました。クラスメイトのくるみちゃんは自信がなく、おどおどしている子で、私はどつちににているかなあと考えました。私はいつもお姉ちゃんに、「もっと大きな声ではっきり言って」と言われるので、

くるみちゃんににているのかもしれない。自分の考えをはっきりと言える京ちゃんみたいな人にあこがれます。京ちゃんは私と同じ四年生なのに、お母さんが死んでしまっているなんて、とてもかわいそうでした。こけしのようなかみがたは、お母さんのことがなつかしくてなつかしくて同じにしていたので、とてもさびしいんだなあと思ひました。同じかみがたにすると、きつと、お母さんがそばにいてくれるような気持ちになるのだと思ひます。

私が一番心に残った場面は、京ちゃんが男の子にバカにさ

れ、お母さんのことまでバカにされた時に、くるみちゃんが大きい声を出した場面です。いつも小さい声のくるみちゃんがあんなに大きい声を出せたのは、京ちゃんを助けたいと思っただけだと思います。知らんぷりでできなかったのだと思います。私も困っている友達がいた時は、はっきりした声で助けたいと思います。その後にくるみちゃんと京ちゃんが先生によび出された時はびつくりし、二人がおこられるのかほめられるのか、とてもはらはらしました。

小学校四年の部 第三席 —— 対象作品／くすのきしげのり作『ぼくらは少年鑑定団！大発見！謎の縄文土器』講談社

縄文時代の子どもたち

弘前大学教育学部附属小学校 中井 太陽

「大発見！謎の縄文土器」

ぼくは、れきしの本を読むのが好きで、中でも旧石器時代や縄文時代が好きです。機かいや技じゆつがない時代に、工夫したり協力して、えものをつかまえたり大きな建物を作ったことを考えると、とてもワクワクします。

ぼくのお母さんは、つがる市木造出身です。木造には、世界文化遺産「亀ヶ岡遺跡」があります。木造の駅には、遮光

京ちゃんがスイスに帰る前に、女の子三人でおばあちゃん家にとまることにした時、男の子が来たので、またバカにされるのかとヒヤッとなりました。でもその時は仲良くなっついて、くるみちゃんがゆうきを出したことが仲良くなることにつながったのだとうれしくなりました。

私も、自分の考えをはっきりと伝え、そして、友達を大切にやるやさしい気持ちを持つて人になりたいです。

石器偶をまねた大きな像が立っています。汽車が入って来ると、目が不気味に光るのも、ぼくの中で大ヒットです。この本の題名を見た時、すぐに飛びつきました。

少年鑑定団は、発見した土器の一部や土器の中に入っていた石ころなどが、約五千年前に自分たちと同じような子どもがうめた「縄文時代のタイムカプセル」ではないかと考えました。少年鑑定団の校長先生は、「縄文時代の人も、花がさ

けばきれいだと思っただろうし、みんなで楽しく食事をした
だろうし、親は子どもの健こころをねがい、子どもは、自分た
ちで遊びを考えたり、友だちといっしょにこころを走り回っ
たりしていたのかもしれないなあ。」と言いました。縄文時
代の子どもたちも、ぼくたちと同じように走り回って遊んだ
り、宝物を大事にとっておいたりしていたんだと思うと、な
んだかとてもうれしくなりました。

少年鑑定団が、古珍堂という古道具屋でお宝鑑定大会をし
た時、店主の中山さんが言いました。

「必ずしも高いねだんがつくものに価値があり、安いねだん
のものは価値がないわけではない。」

小学校四年の部 佳作

なぜ飛ぶのか知れたかったけれど

弘前大学教育学部附属小学校

鳥飼 千歳

『チヨウはなぜ飛ぶか』という題を見た時に、すごくおも
しろそうだなと思いました。なぜなら、なぜチヨウが飛ぶか
知らないからです。

最初、「チヨウはなぜ飛ぶか」に関係なく、チヨウ道にま

ちよつとはずかしいのですが、ぼくはお母さんに、「これ
買って！ たったの百円だから買ってちょうだい！」と、だ
だをこねたことがあります。そのとき、お母さんはぼくに、
「必要な物を買う百円は安いかもしれないけれど、必要でな
い物を買う百円は、とても高いんだよ。」と言いました。ぼ
くは、「お母さんのケチ！」と思っていたけれど、少年鑑定
団のみんなが古珍堂で自分の「本物の宝物」をさがしている
すがたを見て、自分も「自分が本当に良いと思っただものを自
分の目と心で見つける」ことができるようになりたいと思い
ました。きつとぼくには、亀ヶ岡遺跡の縄文人の血が流れて
いると思うから。

対象作品／日高敏隆作『チヨウはなぜ飛ぶか』岩波書店

つわることがのつていました。チヨウ道とは、いつも決まっ
た道をチヨウが通るといっげんしょうです。この道があるチ
ヨウだけしかどうせいないだろうと思いましたが、ないチヨ
ウがいたのでびつくりしました。ないチヨウでも、太陽の位

置でチヨウ道を決めるそうです。なんで太陽の位置でチヨウ道を決められるのか、不思議に思いました。

次も、「チヨウはなぜ飛ぶか」は関係なく「オスとメス」という題でした。その内容は、モンシロチヨウのオスはどうやってメスをさがすのかでした。この作者はにおいでさかすと思ひ、メスをころして外においでさかしました。するとオスがそのメスによつてきました。次に、そのメスを平たいガラスのケースに入れて、まわりをパラフィンでシールをして、においがないようにしました。けれどオスがよつてきました。ほくも、においが原因だと思つたけれどちがいました。作者は次に、チヨウにし外線が見えるので、し外線を

羽に当てるとオスとメスでなんらかのちがいがあると考えました。ほくは、ハチにし外線が見えることは知つていたけれど、チヨウに見えることは知らなかつたのでおどろきました。そのかせつは、当たつていました。見分け方は、オスの羽はし外線を当てると反しやするけれど、メスの羽はその光を反しやしないということです。アゲハチヨウの場合、どうやって見分けるか分かつていないそうです。

最後まで読んで、チヨウがなぜ飛ぶか分からなかつたです。けれど、いろいろなチヨウの知しきを知れたのでいつか生かしたいです。また、チヨウにまつわる本を読みたいです。

小学校四年の部 佳作

『「のび太」という生きかた』を読んで

弘前市立福村小学校

相馬 万生

対象作品／横山泰行著『「のび太」という生きかた』アスコム

私^{わた}が知っている「ドラえもん」の主人公のび太という人物は、いつもいじめられていて、ドラえもんの道具にたよつてばかりです。

でも、この本を読んだ後、のび太を見る目が180度変わ

りました。

その一つは、「ひみつ道具や、ドラえもんの力で、のび太は成長してきた」のところで、「道具を使うと、キリがない！ボクなりにがんばつていくよ。」とけっ心していること

から、最後は自分の力でやり通すことを決めました。それを見て、道具を使うけども、自分なりにやりぬく力を持っている人なんだと思いました。

次に、「有能でも、やさしさがなければ敵を作ってしまう」のところで、たしかにのび太は弱いけど、だれにでもやさしく、人間以外にもやさしい心を持つ人物だと思えます。だから、いじめられていても、最後には相手をゆるし、なにかしら学んでいるから、のび太を本気でにくむ人がいないんだと思います。

そして、「失敗したら再チャレンジするだけ」のところでは、ひみつ道具は、いつでもうまく使いこなせる訳ではないが、人のせいにしたらず、あきらめることなく失敗を何度くり返しても、つねに前向きに行動するのび太は、実は努力家で

もありチャレンジ精神がすごい人でもあるんだと思います。

私が一番感心したところは、「何に対しても、へん見を持たない」です。のび太のやさしさは、人だけに向けられるものではなく、動物や植物にも向けられています。私だったら、ちよつとしたところで友達や物にへん見を持つてしまうことがあります。

たとえば、見た目がハデに見える友達には声をかけづらいです。だけど、話してみると意外とやさしくてホッとして楽しかった経験があります。その時も、人を見た目ではんだんせずに、まずは話してみることから始めようと思えました。

この本を読み終わった後、のび太という人物に対してのイメージがかなり変わりました。私は、のび太のチャレンジ精神を一番見ならおうと思えました。

小学校四年の部 佳作

—— 対象作品／沢田俊子著『ぼく、

がんばったんだよ』筋ジストロフィーの少年の旅』汐文社

筋ジスは和馬君のトロフィーだ

弘前大学教育学部附属小学校

泉

愛菜

「よくがんばったね。愛菜さんの心ぞうはとても元気に動いているから心配ないよ。」

長い長いせいみつ検査が終わった時、お医者さんがにっこりと笑って、ゆっくりやさしく言いました。

それを聞いたお母さんは、目を大きく開いて、少し涙を浮かべていました。

体の中で、風船みたいに大きくふくらんだ「怖い」という気持ちと、「きんちよう」の気持ちが「ぼんつ」と音を立てて割れたような感じがして、頭の中が真っ白になりました。その後やつと安心した気持ちになりました。

私は、筋ジストロフィーという病気になった和馬君という男の子が、電車の沿線を旅する、本当にあつた物語を読みました。

私は、和馬君の旅を応えんしながら、いつの間にか、自分が心ぞうの病気の検査を受けた時のことを思い出して、和馬君と一緒に旅をしている気持ちになっていました。私にも和馬君の気持ちがよく分かるからです。

私が学校からお手紙をもらつた時。お父さんとお母さんが「検査」とか「手じゅつ」の言葉を不安そうに話していた時。お母さんから「病院に行くよ。」と言われた時。

そのしゅん間ごとに、私の不安な気持ちと怖いという気持ちは、どんどん大きくなって

「うそだといいな。夢だといいな。夢が覚めたら元どおり。」と毎日神様に祈っていました。

でも、私はお母さんを心配させたくなかつたから、病院に行くと言われた時、

「ああ、心ぞうの検査でしょ。分かつた。」

とわざと明るく答えたことを、今でもはっきりと覚えています。

検査をしている間、私は色んなことを考えていました。「手じゅつはいたいのかな。」「入院したら、夜も一人ぼっちかな。」「学校をお休みしたら勉強が分からなくなるかも。」「もしかしたら死んじゃうのかな。」

頭の中は、不安と心配でいっぱいでした。でも検査の後、お医者さんの一言で、元気で健康な私に居ることができました。

私とちがつて、和馬君はお医者さんに、「筋ジストロフィーですよ。」

と言われてしまったから、私は、胸がしめつけられるように悲しくなりました。

私には、和馬君のことが自分のことのように思えてしまうのです。

でも、写真の和馬君は、まるで病気なんかにかかつていないような元気な笑顔でした。

「病気は治ってほしいけど、筋ジスはぼくのトロフィーです。」

和馬君が作文で書いたこの文章が、私は大好きです。

ゆうしゅうなお医者さんが、和馬君の病気を治してくれることを信じています。

人間は猛獣使い

弘前市立朝陽小学校

三浦 瑛 士

対象作品／中島敦著『山月記・李陵』 KADOKAWA

この本は姉の本だなの中にずっとあったのだが、作者の中島敦が三十三才という若さで亡くなったという事を知り、その若さで、どんな内容を書いていたのか興味をもったので、『山月記』という物語を読んてみた。

物語の舞台は中国で、李徴りちようという人物が虎とらになってしまふという、とてもおどろかされる展開である。あつという間に読み進めてしまったのだが、その中でも心に強く残った文がある。

「人間は誰だれでも猛獣使いであり、その猛獣とは、その人の生まれ持った性格だという。」

これは虎になつてしまつた李徴が、友人の袁えん彦げんという人物に言つた言葉だ。ぼくは自分自身の中にも猛獣がいるのだと、ゾツとするような気もしたが、考えてみれば、なつとくできる部分もある。ぼく自身も自分の性格に嫌きら気がさしてしまふような事があるからだ。そして、この物語での猛獣は、「えらそうえらそうな羞恥心しゆうちしん」であると言つた。

ぼくの場合、ちよつとした事で才能や能力が無いと落ちこんでしまふという猛獣がいる。でも、それはぼくが生きているからこそ共に存在そんざいしている。だから、その猛獣と生きていくために猛獣使いにならないといけない。なぜつて、その猛獣を上手あつかく扱あつかうことができるようになれば、いつか自分の役に立つて生きてくれる事さえ有り得るのではないかと考えたからだ。

例えばぼくは、足が速くなりたいと思うのに、練習や努力をあまりしない。したくないわけではない。頭の中で、どうするかぐるぐる迷つている。きつとこれが猛獣だ。猛獣を手なづけるのには、自分にきびしくばかりするのではなく、まずは、自分を認める事が大切だと感じる。もしかすると、手なづけられるようになるには数十年どころではなく、一生かかるのかもしれない。でも、それまで色々な努力を続けて前向きに、そして、自分の中で共に生きている存在そんざいを忘わすれないうように生きていこうと思う。

みんなの楽しい学校をつくるために

弘前市立文京小学校 古川 隆 惺

ぼくがこの本を読んだきつかけは、自分も児童会長にきょう味があつたからです。

きつと、この本を読めば、児童会長になる方法や児童会長の仕事に分かると思いました。

でも、この本は、負けずぎらいで熱い主人公の横山雷太が、周りをまきこんで、児童会長になるために、演説をしたり、ポスターなどで、自分の人気を高めたりするというむずかしいチャレンジを、次々とこなしていくワクワクするお話で、続きが気になるので一気に読んでしまいました。

主人公の雷太は、なんて楽しそうな学校生活を送っているのだろう。これが、読み終えたときに、最初に感じたことです。雷太は、勉強も運動も得意ではなく、先生にもよくおこられます。最初は、こんな人が児童会長なんて絶対ありえないと思っていました。児童会長になる人は、勉強や運動が得意で、みんなのお手本となる人だと思っていました。でも、雷太は正反対の人です。でも、雷太には、とても信頼できる

仲間がたくさんいます。クラスのみんなが協力してくれます。雷太のいいところは、まわりの人が協力したくなる人がらだと思えます。それは、同じ学年だけではなく、一年生から六年生までです。ぼくも勉強や運動は一番ではありませんが、雷太のように、クラスや年れいがちがっても助け合いができる人になりたいと思いました。

次に、この本を読んで強く心に残ったのは、最後の演説で、「みんなをグイグイひっぱっていくような児童会長にも、たぶんなれません。だから、もし、オレが児童会長になったらみんなで助けてください。で、どうしたら楽しい学校になるか、意見を出してください。解決できることばかりじゃないけどオレもいつしよになやむから。考えるから。ひとりになやまないで」という雷太のせりふです。この言葉から、雷太が一人でこの学校をよくするのではなく、みんなで意見を出し合い、助け合つて、よりよい学校にしようという気持ちがあるととても伝わりました。この本を読む前のぼくが児童会長

なつたら、リーダーシップが大事だと考えてグイグイひっぱっていくが、みんなの意見を聞かずに、楽しくない学校になつていたと思います。でも、みんなのことを考えて、協力し助け合うということがとても大事なことだとわかりました。ぼくや学校みんながするように考えることで、今よりずっと楽しい学校になると思います。

小学校五年の部 第三席

—— 対象作品／アンドロリュー・クレメンツ作『こちら『ランドリー新聞』編集部』講談社

自由と責任

弘前大学教育学部附属小学校

對馬 朋 笑

わたしは、これまでずっと新聞係だった。四コマまん画やうらない、クイズなど、読む人を楽しませる工夫をして新聞を作ってきた。みんなを楽しませる以上に、わたしが書くことをとても楽しんでた。

カーラ・ランドリーは、長らく「教える」という事をしてこなかつたカーラ・ラーソン先生のクラスに転校してきた。「ランドリー新聞」を始めたカーラは、仲間と共にクラスメートの「離婚の物語」をのせた。先生と対立している校長のバーンズ博士は、この新聞の物語を使って、先生をクビに

ぼくはこの本を読み終えて、児童会長は、成績や運動だけでなく、どんなに悪いことがあつても、あきらめずに乗り越えられる気持ちが大切だとわかりました。

これから、ぼくは児童会長になれるようにみんなのことを考えて、協力し助け合いながら、みんなで楽しい学校生活をすごしていきたいです。

しようとする。先生は、子どもたちと新聞を守るため、「報道・出版の自由」について教える。そして、カーラは聴聞会で先生を救うのだった。

読み終えて、カーラの新聞はただの楽しい新聞ではなかつた事におどろいた。カーラの新聞には、人の言動を変える力があつた。新聞の役割や、「報道・出版・表現の自由」について考えさせられた。

わたしは、夏休み中に新聞記者のお仕事体験をした。その時、記事の原こうにインタビューした事実と感想を書いたが、

どちらかというところの作文のようだった。編集してもらった新聞には、わたしの感想はカットされていた。きつと、記者の気持ちを書いてしまうことで、読み手に一方的な考えを植え付けてしまうことになるからだろう。新聞やニュースを伝える時は、公平に事実を伝え、読者に自由に考えてもらえらるるに気を付けているように感じた。これは、人のことを考えている一種の思いやりだと思つた。だから、ニュースを受け取つた人が、自由に考えたり話し合つたりすることができるのだと思ふ。

では、表現の自由とは何なのか。今、世の中はインターネットがある生活が当たり前になつてゐる。誰でも自分の考えなどを気軽に発信でき、とても自由だ。しかし、「自由すぎる」ことで自分の意見に責任をもたない人、個人をひぼう中傷する人が増えている。やはり、自由だからといって、何で

も好きなように表現して、何を発信してもいいわけではないと思ふ。その間違つた自由が、いじめや心の病気につながることもある。この時代に必要なのは、きつと「人のことを考えられる優しさ」なのだろう。「人のことを考えられる優しさ」をもつてゐるなら、自由に好きなことを投稿してもいいのではないかと思ふし、人をいい方向に変えたり、心を温かくしたりすることができると思ふ。

わたしはスマホも持つてゐないし、何かを発信できるアプリを使ったこともない。でも、この先これらを使うようになった時には、「人のことを考えられる優しさ」を大事にし、表現することの自由に責任をもちたい。そして、将来の夢である作家になつたら、この気持ちで人によりそえるものが書きたい。

犬の感情

弘前大学教育学部附属小学校

高杉 宥 佑

ぼくは、『タロとジロ〜南極で生きぬいた犬〜』という題名の実話の本を読みました。読んだ理由は、題名に「南極で生きぬいた犬」と書かれていたからです。「南極で生きぬいた」という事よりも深く考えたのは、「生き物としての犬」についてでした。

この本には、今から六十七年前に行った南極観測の犬ぞりの役目をする二十四ほどの犬達と、犬係の北村さんと菊池さんが体験した話がかかれていました。南極観測のため集められた犬は、二十四ほどもいました。性格は様々さまざまでしたが、北村さん達のおかげで無事に計画が進められました。しかし、やはり南極なので残念な事もあり、犬がどこかへ行ってしまうたり、死んでしまったりと十五匹にへってしまいます。さらに、菊池さん達は犬達を残して帰らないといけなくなってしまう、犬は全滅つしてしまう事態になってしまいます。それから一年ほどたち、もう一度南極へ行くと、子熊くまほどの大きな犬が見つかったのです。名前はタロとジロ。一番年下の

二匹でした。なんとこの二匹は生きていたのです。

この話には、時々、犬の性格や気持ちを表す所が出てきます。例えば、十六匹ほどにへってしまったところ、基地の犬小屋に病気にかかり死にそうな犬が出てしまった場面がありました。基地にもどった菊池さんや他の隊員が心配している時、めったに犬小屋に入つてこない他の犬達も入つてきたのです。この場面で、ぼくは、めったに入つてこないのに、「心配をして入ってきたという所から、やはり犬は感情や気持ちをもつてるんだなと思いました。ぼくはそこに特に興味をもちました。もし、人間と同じはずかしいやうれしいという感情をもっているなら、例えば犬を売つたりする時、自分から飼い主を選ばせてあげて、勝手に買つたりされない方が犬にとつて良い事なんじゃないのかなと思いました。

ぼくがこうやって犬について考えるようになったのは、犬との南極観測の生活が多く書かれていたからという理由もありますが、隊員達のやさしさがある行動を読んだからです。

例えば、犬が足のうらをけがした時に、くつ下をはかせてあげていたみをおさえてあげた、という場面がありました。このような菊池さん達の犬に対するやさしい、子どもにやるよ

うな思いが、犬に対するぼくの気持ちを変えたのだと思います。犬をかわいいうちやしと見るのもいいですが、犬は感情を持った生き物としても見てほしいです。

小学校五年の部 佳作

対象作品／山口理作『リターン！』文研出版

『リターン！』を読んで

弘前市立北小学校

松山 佑季

ぼくは、『リターン！』という本を読みました。この本を選んだのは、五年生に読みたい本として、図書館で紹介されていたからです。

この本は、一樹が主人公の物語です。一樹は、めんどくさがりやで消極的な人でしたが、ブーメランに夢中になり、仲間と大会を目指すことになって、どんどん積極的になって変わっていく自分におどろく経験をします。

ぼくがこの本を読んで、いちばん心に残ったところは、一樹が仲間のけがというアクシデントがあつて、自分のせいだという気持ちになり、大会前に仲間とケンカになってしまったところです。ぼくはこの部分を読んで、一樹のようにやっぱり結果が全てだと思つた気持ちも分かるけれど、チームで戦

うので、結果を急いだら決して良い方向には行かない、急がば回れが大事だということに共感しました。なぜなら、ぼくも集中力が続かないけれど、早く宿題プリントを終わつてスッキリしたいと思つたけれどあせつて進まなくて、でも一回休けいや気分転換をすると、時間を無駄だにしているようで、宿題を終えることができた経験があるからです。また、学校でもマラソンやドリル自習がおくれている、気持ちはあせていたけれど、同級生が、

「佑季、残りのドリル四ページだよ。」

「夏休み前のお楽しみ会、みんなで参加できるようにがんばれ。」

と応援してくれて、力をもらつてやりとげることができま

した。

ぼくはこの本から、団結は大事である事と、アクシデントがあつても結果ばかりを急がず、みんなで意見を出し合つたり、協力したり、応えんし合つたりして、進んでいくことが大切だと学びました。これから、五、六年生の時間、同級生とのコミュニケーションを取るようにして、自分の好きなことやきょう味のあること、苦手なことにも色々とアンテナを

はつてすぐしたいと思えます。自分の好きなことを見つけたら、たくさん調べたり練習したりして、じつくりと努力したいと思えます。ぼくは五年間スイミングを続けていますが、六級のテストでタイムがなかなかクリアできていません。でも、年末までに合格する目標をもって、あきらめないで取り組んでいるところです。一樹たちのように、急がば回れでがんばっていきます。

小学校五年の部 佳作

自分らしく生きること

弘前市立時敏小学校

伊藤 楓乃花

対象作品／廣嶋玲子作『作り直し屋』 静山社

^{わたし}私は本が好きで、毎週図書館に行っています。そこで『作り直し屋』という本が目に入りました。カラフルでかわいい表紙が目に入り、おもしろそうだと思ひ手に取りました。

『作り直し屋』という物語は、主人公のツルさんが、いらなくなつた物や捨てられないものから、ま法ですてきな物に作り直して、持ち主に新しい可能性や希望をあたえていく物語です。私がこの物語の中で印象に残つたシーンは三つあります。

一つ目は、ミアという女の子が、弟のためにほしい物をがまんして星のモビールを買うシーンです。私はこの話を読んで、ミアをそんけいしました。なぜなら、ミアはほしいものがあつたのに、病気がちな弟へ星のモビールを買つたからです。もし私だつたら、ミアのように自分がかまんしてまで兄に何かを分けることができなと思ひました。しかし、家族のためになるなら、自分をぎせいにすることも時には必要だと考えました。

二つ目は、もらったホテルのドアで家を建てるのが夢のトクさんが、こわれてしまったドアをドールハウスに作り直してもらったシーンが好きです。なぜなら、トクさんは家族のためにすてきな家を建てたいと思っていました。一人ではかなえることができなかったからです。私は今、琴ことの発表会に向けて練習しています。一人だけではつらくてあきらめてしまいそうになりますが、家族がいつしよに夢をかなえてくれようとしたことが大きな力になると思いました。

三つ目は、ツルさんがエプロンを作り直すためにさいほう箱を使うシーンです。なぜなら、自分に自信のなかったツルさんが、ちよつとしたキツカケで自分の才能に気付いたからです。私は何をやっても失敗すると決めつけてしまっています。

しかし、自分の好きなことを好きなようにだれかにあわせるのではなく、自分らしくいていいんだと思いました。

『作り直し屋』を読み終えて、大切な家族のためにがまんをしたミアをそんけいし、家族と一緒に夢をかなえたトクさんに喜び、自分らしく生きることができたツルさんにきょう味をもちました。ツルさんがいらなくなつたものを作り直すことが持ち主の思いこみを取り除き、一歩ふみ出す勇気を与あたえてくれたと感じました。いつも私を応援してくれる家族を、自分自身を大切に、周りでなやんでいる人がいたら一歩ふみ出す勇気を与えられるような、だれかによりそえる人間になりたいと思いました。

幸せなたまご

弘前市立城西小学校

小林 摩 幸

私は、読書感想文を書くために弘前市立図書館へ本を探しに行きました。『いつか空の下で』という、まるでテレビドラマみたいな題名で、表紙には目が真ん丸でかわいいニワトリと、そのニワトリをなでるように持っている女の子の幸せそうな表紙にひかれて借りてきました。本を読んであとからわかったけど、その表紙の絵はこの本の最後の場面を表していました。表紙は幸せそうだったのに、本の内容は全然違いました。

主人公あすかが暮らしている町の養鶏場^{けいじょう}では、安いたまごを生産するために、ニワトリをせまいケージに入れて環境^{かんげい}が悪^{わる}いところで育て、たまごが産めなくなったらニワトリを処分^{ぶんぶん}しています。

それを知ったあすかは、みんなに養鶏場のことを知ってほしくて新聞を書くために図書館で家畜^{ちか}やたまごについて書かれている本を読んで、アニマルウェルフェアのことを知りました。私もアニマルウェルフェアのことを調べました。アニ

マルウェルフェアとは、日本語で言うと動物福祉^しです。生まれてから死ぬまでの間、ストレスをできる限り少なく、自由に動けて、けがや病気にならないで暮らせる飼いかたを指す畜産のしかたです。ニワトリが自由に動けたり、病気にならないで暮らせるから、ニワトリにとっていいことだと思えます。また、たまごを食べる私にとつて、ニワトリの環境^{かんげい}が悪いほうのたまごは、汚^{きたな}いところで飼われているとたまごまで汚くなりそうだけど、ニワトリの環境^{かんげい}がいいほうのたまごは、おいしそうだし、元気だから食べると自分も元気になれるそうだと思います。

あすかが新聞にたまごの値段を高くしてニワトリの環境を良くしようと書いていたので、私はニワトリの環境^{かんげい}がいいところで産んだたまごはないか調べたら、平飼いたまごというのがでてきました。平飼いたまごとは、地面に放して飼ったニワトリが産んだたまごです。平飼いたまごが近くのお店でも売っていることがわかりました。値段を見たら高いなあ

思ったけど、ニワトリが自由に動いているから値段が高いことがわかりました。

『いつか空の下で』は、ニワトリが空の下で自由に過ごしてたまごを産んでほしいなあという願いがこめられていると思います。この本は、アニマルウェルフェアのことについて

小学校六年の部 第二席

『注文の多い料理店』が教えてくれたこと

対象作品／宮沢賢治著『注文の多い料理店』ポプラ社

弘前市立福村小学校

小笠原 香穂

私は、この本のタイトルがとても気になります。一般的に、注文の多い客が言葉としては正しいと思います。でもこの本は、注文の多い料理店です。料理店が注文？と不思議に思い、この本に興味を持ちました。

宮沢賢治の作品の多くは、彼の故郷であり、理想郷でもある岩手を舞台に書かれています。この作品も、都会から遠くはなれた山の中をイメージして創作されたのでしょう。大正時代にできた作品とは思えないほど、異国情緒あふれる絵画的な要素をたっぷりもっているにもかかわらず、とても考えさせられる作品でした。このお話の主人公は、二人の若

書かれています。私はこの本を読むまでアニマルウェルフェアのことを知らなかったから、みんなにも知ってほしいと思いました。動物も人間も、両方が元気に過ごせるようになるといいなあと思います。

い紳士だと考えられます。その二人は、遊びのように次々狩猟していきます。また、一緒にいた白くまが目の前で死んでも、お金のことしか考えていませんでした。二人が気づくと、かれらの案内人とはぐれていました。かれらはどうすることもできず、ひたすら歩いていました。すると、目の前に立派な洋風の料理店が見えてきました。かれらは、そこに吸い込まれるように中に入りました。でもその中には、おいしい料理や、お店の人もいません。そこには、「服をぬいで、くつのだろをおとして、牛乳クリームをぬりなさい。」などと書かれたはり紙と、ドアしかありませんでした。さすがに、か

れらは様子のおかしさに気づいていました。怖こわくなって逃げようとしても逃げられませんか。そんなところに、山猫やまねこがやってきました。ナイフを持ち、ナプキンをかけ、かれらを食べる気満々です。かれらは、泣きくずれてしまいました。すると、さつき死んだと思つた白くまが助けにきてくれました。その白くまのおかげでかれらは助かつたのです。かれらは、どんな思いだつたでしょう。感謝してもしきれないと私は思いました。

私はこの本を読んで大切だと思つたことは、命の大切さです。最近、罪のない生き物が深く考えない人間に殺されていく話を聞き、かれらは、どんな思いで罪のない生き物を次々と殺しているのだろう。と不思議に思います。その生き

物は、私たちにどんなものをあたえてくれているのか知つた

上で、殺しているのでしょうか。その生き物が絶滅たつごつしたら私たちの平和な日常がかわれるかもしれない。そのくらい深く考えているのでしょうか。それは人間でも、最近いろいろな殺人事件があります。自分にとつて他人でも、だれかにとつて大切な家族かもしれない。そのことを世界中の人に知つてもらいたい。私には関係ない。じゃなくて、私にできることはないか。という考えを持つ人が多くなれば、この世界はもつとよりよくなると思います。私は、将来いろいろな人の命と向きあつて、いろいろな人を笑顔にする医者になりたいです。そして、この本で学んだ命の大切さをもつといろいろな人に教えたいです。

小学校六年の部 第三席

命の大切さ

弘前大学教育学部附属小学校

三浦 一華

私は『電池が切れるまで』という本を読みました。この本を選んだ理由は、一番大好きな本だからです。

この本は、主人公のゆきなちゃんや周りの子ども達が、つ

対象作品／宮本雅史作『電池が切れるまで』KADOKAWA

らい病気がたたかいたがながらも明るく笑顔で生きていくという物語です。

私がこの本を読んで、一番心に残っているのは二つありま

す。一つは、

「おかゆはいや。」

「またひとり、天国にいつちゃったんだよ。」

と、ゆきなちゃんがおかゆをいやがった時に、おもわずお母さんが言ってしまったという会話です。この「ひとり」とは、ゆきなちゃんの友達のことです。病院では、この二人が本当の姉妹だとかんちがいするほどの仲良しでいつも一緒でした。この場面を読んで、私も自分の命も友達の名もいつ途切れてしまうか分からないけれど、大切にしよう、命だけではなく毎日の日常も大事なんだ。と思いました。もし私がゆきなちゃんだつたら、入院の途中で生きるのをあきらめていたかもしれない。なので、いたくても苦しくても、つらくても頑張つて生きていくゆきなちゃんはすごいな、私もすぐにあきらめずに見習おう。と思いました。

二つ目は、

「先生、ぼくね、家であばれていたことがあるんだ。」

「でもね、病気になったら、親も、兄弟も、家族のみんながすぐくしんばいしてくれて、ありがたさがわかったんだ。

だから、病気はね、神さまがぼくにくれたプレゼントだと

おもう。」

と、長く入院している中学生のふじもとくんが言った言葉です。この「先生」とは、病院に長いあいだ入院している子どもたちのための、病院のなかの学校の先生のことです。

私はこの場面を読んで、なるほどと思いました。なぜなら、この本に出てくる他の子ども達は、なんで私だけこんなつらい思いをしなきゃいけないのと悲観的に考えてしまうのに、ふじもとくんは神さまからのプレゼントだとおもうとポジティブに考えていて、明るく考えることで自分の心も明るくなるのか。と感じたからです。

この本から私は、人の命の大切さを学びました。本の題名『電池が切れるまで』の電池は、ゆきなちゃんが理科で豆電球の実験をしていた時に、電池はいつでも取りかえられるけど自分の命は取りかえられないことに気づき、それを国語の時間に「命」の詩として書いた、その中の言葉のことです。

わずか十一さいで亡くなってしまったゆきなちゃん。病気がつらくても、明るく笑顔で生きてきたゆきなちゃんを見習って、今日を、一日を、今という時間を大切にしていきたいなど、この文を書いて改めて思いました。

イクバルがくれた「勇気」

弘前市立大成小学校 高山京慧

「ぼくは学校が嫌いですー」

理由はいくつかあるけれど、学校に行きたくなくて、休んだこともあります。でも、ぼくには学校に通う「権利」があります。おこられるけど、お母さんに口答えをする「自由」もあります。

この物語の主人公イクバルは、学校に通えず、十分な食事もらえず、夜明けから日暮れまで働かされている子どもたちを救った勇気ある少年です。イクバルの国パキスタンでは、親の借金が原因で働かなければならない子どもたちが、約七〇〇万人もいるそうです。子どもたちの一日の給料は、たったの「ルピー」！日本円だと一円未満です。しかし、働いても働いても、借金がなくなることはありません。でも、誰も文句を言いません。おかしいとも思いません。なぜなら、それが「あたり前」だからー

「え！どうして!?なぜ逃げないの？なぜみんな、おかしいと思わないの？」

ぼくは最初、不思議でたまりませんでした。でも、本を読み進めていくと、その理由はすぐに分かりました。学校に通えないから字が読めず、本を読めず、知識を得ることができないからです。そして、子どもたちの親も学校に通ったことがないから、なにが正しくてなにが間違っているか、知らないのです。

ぼくは学校に通っているから、字が読めます。本を読めます。正しいことと、そうではないことの区別がわかります。でも、もしパキスタンに生まれていたら…イクバルと同じように、うす暗いじゅうたん工場で、夜明けから日暮れまで働いていたかもしれせん。なんの希望も、なんの疑問も抱かずにー。

ぼくは今まで、学校に通えることはあたり前だと思っていたけれど、勉強ができること、お腹いっぱい給食を食べられること、友達と遊ぶこと、どれも日本という国に生まれたからこそ、できていたんだと気が付きました。「学校なんて嫌

いだ」と平気で口にしていた自分を、とてもはずかしく思いました。学校を好きになれるように、なんの努力もしないで甘えていた自分がいたことを知りました。

イクバルのように、ほんの少しの勇気をもって行動しよう。ルールを守らない友達がいたら、見て見ぬふりをしないで注

小学校六年の部 佳作

対象作品／岡崎ひでたか作『天と地を測った男〜伊能忠敬〜』くもん出版

何かをやりとげるために必要なこと

弘前市立福村小学校

矢田谷 昇 太

ぼくは、『天と地を測った男』という本を読みました。六年生で歴史の勉強を始めてから歴史に興味があり、図書館の伝記コーナーにあった本のタイトルが目にとまりました。きっかけです。

この本は、江戸時代に正確な日本地図をつくった、伊能忠敬という人について書かれた伝記です。忠敬が子どもの時代から、商人として家業を盛り立てたのち、隠居して江戸に出て天文学や測量術を学び、その後全国を測量し、最後は忠敬が亡くなった後に弟子たちが「大日本沿海輿地全図」を完成させたところまでが書かれています。

意しよう。不満ばかりを口にするんじゃないやなくて、まずは自分から行動しよう。努力をしよう。そうすれば、きつと少しずつ学校が好きになれるはずだから。

「ぼくは、もう迷わない。なにも怖くない。」

ぼくがこの本を読んで心に残ったところは、忠敬が歩いて測量をし、夜は寝る間もなく星の観測をし、その当時一番正確な地図を完成させたところです。また、幼いころの忠敬（三治郎）のことも書かれており、母を亡くしてから北の星をかあちゃんの星と思つてよく夜の星空を見上げていたこと、算法が得意であったことなどが印象的でした。

江戸に出た忠敬が天文学を学んだころは、地球は球形であることはわかっていましたが、地球の大きさはまだだれも知りませんでした。地球に基盤のような目盛をつけ、その緯度（緯度）一目盛り、一度分の子午線の長さかわかれば、計算で地球の

直径もわかるだろうと考え、いつかその正確な距離を求めようと思します。

幕府から蝦夷地の測量許可があり、第一次測量に出発します。一步の長さを測り、何歩歩いたかで距離を出す歩測をはじめ、磁石で方角を測る道具、星の高度を測る道具などを使い、道線法や交会法などを用いて丁寧に測量していきます。その結果、当時の地図と比べたられもがおよそくほど正確な地図をつくり上げました。幕府からも信頼を得た忠敬は、その後も第二次、第三次測量と、器材を改良しながら、隊員たちと次々に地図づくりをしていきます。

測量を進めるうちに、念願の緯度一度分の長さが二十八里

小学校六年の部 佳作

情報は自分で確かめよう。

弘前大学教育学部附属小学校

成田歩生

みなさんは、もし無人島に漂流したらどうしますか？ぼくは、すぐ帰れるようにいかだを造ります。しかし、この本の登場人物は何をするのか気になってこの本を選びました。

この本は、八歳から十四歳の十五人の少年たちが主人公の

二分であることを突き止めます。実際にその一年後、忠敬が導き出したその距離が、西洋の最も新しい研究で報告された距離とびつたり一致することがわかりました。

現代のようなすぐれた器材がないところに、正確な地図をつくらうと、とてももなく長い距離を自分の足で歩き、丁寧に測量を続けたところが、とてもすごいと思いました。

大きな仕事をやりとげるためには、根気の強さが必要だと感じました。ぼくも、忠敬のように一つ一つ丁寧に積み上げ、目標に向かって最後まで根気強くがんばれるようになりたいです。

対象作品／ジュール・ベルヌ著『十五少年漂流記』集英社

物語です。少年たちしか乗っていない船が沖に流されてしまいい、チェアマン島という無人島に漂流します。そして、故郷に無事帰るために、様々な試練に立ち向かいます。

ぼくがこの本を読んで一番心に残ったところは、ジャック

が自分のいたずらのせいで船が流されてしまったとみんなに伝えた時に、誰も責めることなく受け入れていたところでは、ぼくはその場面を読んで、とてもびっくりしました。なぜなら、もしぼくがジャックの話聞いていた立場だったらと考えると、言葉には出さなくとも、心の中ではどうい受け入れられないだろうと思っからです。自分たちがチエアマン島に漂流してたくさんの苦勞をした原因が、まさか友達のいたずらだったと考えると、とても腹が立つと思います。しかし、みんなにとっても申し訳ないと思っていたジャックは、危険な仕事を自ら受け入れていました。その様子を見て、ぼくはジャックの悪いところだけを見て判断してはいけなないと気づきました。

例えば、友達が大きな失敗をしてしまったとします。その情報だけを聞くと、ミスをしてしまった理由や、友達は今どういう気持ちなのか分かりません。それなのに、一方的におこつてしまい、聞いた情報を確かめずにその友達をさけてしまふ人がいます。本当のことが分からないのに、さけることは良くないことだと思えます。

ぼくはこの本から、不確かな情報で物事を決めつけるのではなく、実際に自分で確かめることの大切さを学びました。これからは、自分で情報を確かめ、周りに流されたり、まどわされたりしない人間になりたいです。そのことが出来たら、大きな失敗をした友達でも許せるようになり、よりそつてあげられるなと思えました。

中
学
校

三 二 一

年 年 年

の

部

世界の分子としての僕

弘前大学教育学部附属中学校 吉田 蒼汰

「面倒くさいなあ。」

中学生になった僕は、中学受験も終わって、ゴールが分からなくなってしまう。勉強も面倒くさい、将来はできれば楽に生きたいとも思っていた。毎日楽しいけれど、もやもやして不安がおそってくる。こんな自分じゃだめだと心のどこかで分かっていた。そんな時、もしかしたら生き方を教えてくれるかなと期待して、この本を手にとった。

この本は、自分と同じく悩んでいる中学生のコペル君の話だった。コペル君は優しく誠実だ。友達に対して正直だし、友達への謝罪の手紙に、

「君たちのこと、どうでもいいと思ったことは、一秒だってありません。」

と綴る。こんなに大切に思ってくれるなんて、もし同じクラスにいたら絶対に仲良くなりた。でも、そんなコペル君の悩む心の中は、意外にも僕そっくりだった。僕は驚きながらも、少しほっとした。

僕が心に残った事件がある。友達が上級生になぐられるような事になったら、みんなと一緒に、と約束したのに、自分を守るために約束を破ってしまう。その姿を見て、卑怯ヒキョウでかっこ悪いと思っただけれど、後悔して言い訳を一生懸命考えているコペル君は、僕と似ているとも思った。

僕は、言い訳を言う時、心の中では本当は良くないと分かっているけれど、認めたら自分をもっとダメだと思ってしまう。だから、自分の気持ちもごまかして言い訳を続けていた。でも、コペル君は結局言い訳をせず、手紙で正直な気持ちで謝った。その姿を見てえらいなあと思ひ、同時に僕もコペル君のようにすればよかつたと思ひ、後悔した。

コペル君も、謝るまでとても後悔していた。でも、コペル君のおじさんは、その間違いも間違つて良かったと教える。えっ？間違わないでいる方が良いんじゃない？と僕は思った。でも、おじさんは、

「自分の過ちを認めることはつらい。しかし過ちをつらく感

じるということの中に、人間の立派さもあるんだ。」

と教えてくれた。自分の過ちの後に、どのように行動するかがその人の強さになるのだと思った。それに、後悔をするのは自分の中の良心に従って行動する能力があるからだとおじさんが教えてくれた。僕は後悔を引かずって落ち込んでしまうことが多かったけれど、その後悔から学ぼうとすれば無駄にならないと気付き、勇気づけられた。

また、僕が感心したのは、コペル君が考えた「人間分子の関係、網目の法則」というものだ。これは、人間は世界の中の分子で、大勢の人と網のようにつながっているというものだ。僕は考えた事もなかった。コペル君は、自分中心ではなく、俯瞰的に捉えて、自分は、世界の一部分だと考えていた。僕は自分中心の世界で、自分がどう行動すれば、幸せになるかしか考えていなかった。恥ずかしいと思った。自分が正しいとばかり思うと、自己中心的な考えになってしまうけれど、

自分が世界の一分子だと思うと、自分は世界にどんな事ができるかを考えてられると思った。僕はそのことを学んで、まず「他の人の役に立ちたい」と思った。僕は小さな分子だけれど、分子の動きは他の分子に働きかけることができる。そう思うと、自分が幸せではなく、周りも幸せにすることが幸せなのだと思うた。

世界が分子の集まりだとすると、一つ一つの分子は、互いに助け合える力があると思う。なぜならおじさんが、「人間は憎み合ったり、敵対しあったりする時に苦痛を感じる。それは、人間の本来の姿ではないからだ。」と教えてくれたからだ。

この本は、最後に「君たちはどう生きるか」と問う。僕は、他の分子と手を取り合う分子でありたい。正直で優しくありたい。そして、

「他の人のために行動する人間になりたい。」

ラッキーガール夢を跳ぶ

弘前大学教育学部附属中学校 小笠原 琉 仁

夢を跳ぶとはどういうことだろう。ぼくはこの本の題名を不思議に思い、手にとってなんとなく読んでみました。

この本には、元女子陸上トライアスロンのパラリンピック選手である佐藤真海さんが、様々な困難を乗り越えながら、北京パラリンピック日本代表に選ばれるまでの道のりが書かれています。佐藤真海さんの実体験です。

真海さんは大学生のころ、骨肉腫という生死に関わる病気にかかってしまいます。そして、命のために右足の膝から下を切断しています。

この本を読んでぼくは、北京パラリンピックに出るという目標を達成したことよりも、つらいことがあっても笑顔、そして目標に向かってくじけずに、諦めず努力し続けることができたことがすごいなと思いました。ぼくだったら足がないということ、歩くこともできない、遊ぶこともできない、つまり、できることよりもできないことのほうが多いと思います。何もやる気が起きません。

真海さんは自分をラッキーガールと呼んでいます。なぜ、足がないというハンデを持っているし、困っていることやできないこともたくさんあるのに、自分をラッキーガールと呼んでいるのでしょうか。ぼくは、ラッキーかどうかはわからないけど、本の中のものっている真海さんの写真は、ほとんどが笑っている写真でした。なんで自分をラッキーだと思っているのだろう。それが不思議でした。本を読んでいくうちに、それがわかったような気がします。

それは、真海さんは障害をマイナスとして考えるのではなく、自分の個性、そして命の尊さや本当の幸せを学ぶことができた経験と捉えているからだと思います。そして、生きていくなどの当たり前で小さなことでも感謝しているからだと思います。真海さんのお母さんの言葉で「神様はその人に乗り越えられない試練は与えない」という言葉が、とても心に残っています。真海さんもこの言葉を思い出して、気持ちを前向きに切り替えることができたそうです。ぼくだったら試

練にあたったとき、強い心を持つことができなくなり、試練に負けてしまうと思います。挫折してしまおうと思います。真海さんは試練をただの苦しいものと考えたのではなく、必ず意味があり、その闇が晴れた時、想像以上の幸せや喜びが待っていると考えています。ぼくはこの考え方がすごいなと思いました。

もう一つの理由は、たくさんの素敵な人達に支えられていたということです。パラリンピック出場までに、素敵な言葉をかけて励ましてくれた母親、同じ病気仲間、義足を調整してくれている白井さんなどたくさんの人に出会い、支えられていました。自分一人ではなく、周りの支えがあつたからこそ、パラリンピックを目指すことができたのだと思います。

ぼくは以前母に

「あなたの長所はわからないけど、ものすごく人に恵まれている。」

と言われたことがあります。ぼくには足はあるけれど、実は心臓の重い病気を持っていて、昨年手術をしました。ちよつと走ったりするとすぐに息が上がりが、心臓に負担がかかつてしまいます。しかし、今まで学校に行きたくない、生きたくない、死にたいなどと思ったことは一度もありません。それ

は、家族や医師の先生、友達などのたくさんの支えがあつたからだと思います。自分一人ではできないことも、周りの人の支えがあればできるようになるということに改めて気づきました。そして、夢に着地するではなく、「夢を跳ぶ」なのは、夢をゴールと捉え、夢を叶えて終わりでではなくその次にも常に希望を持ち、明るく前向きに考えていこうということなのだと思います。

この本を読む前のぼくは、困難なことやハンデはマイナスでしかないと思っていました。しかし、何かしら意味があり、乗り越えた先には大きな希望や明るい未来が待っているから前向きに考えよう、と思うようになりました。障害があるかないかは関係なく、人にはそれぞれ悩みがあると思います。その悩みをどう捉えるかというのは大事なことだと思います。ぼくは前向きに考えていく、それができなかったとしても、決してマイナスには考えないようにしたいなと思えました。そして、自分一人ではできないけれど、周りの人のおかげでできることがたくさんあるんだということを忘れずに、小さな当たり前のことに感謝できるようになりたいです。そしてぼくも、夢を跳んでいきたいです。

仲間と走る

弘前市立南中学校

八木橋

颯

ぼくは、散々迷った挙げ句、入部を決めた。しめきりのぎりぎりまで迷って、しめきり日当日に入部届を出した。入部したのは陸上部。榊井や設楽と同じ陸上部だ。

自分が陸上部だから、という理由が大きかったかもしれないが、とにかくぼくは、市野中学校の駅伝メンバーに自分を重ねた。一区は設楽。二区は大田。三区はジロー。四区は渡部。五区は俊介。そして六区は榊井。どのメンバーも自分と似ているところなどなかったはずなのに、気が付けば自分を重ねて、一緒に走っている気分になった。

一区。何となくはつきりしないところは自分に似ているのかもしれない、と思いつながら、ぼくは設楽を見ていた。小学校の卒業が見えてきたあたりから、ぼくは友達とよく部活動の話をした。何部に入部するのかすでに決めている友達もいれば、ぼくみたいにまったく決まっていらない友達もいた。陸上部に入りたいとぼんやり思っただけで、吹奏楽部にも興味があったし、一緒に入部するメンバーも気になっていた。

た。小学校から野球を続けていたぼくの友達みたいに、強い思いがあったわけではなかったから、ぼくは設楽の気持ちがよく分かった。追い込まれないと気持ちにエンジンがかからないところも、どこか自分に似ているな、と考えながら、ぼくはたすきを大田に渡した。

二区。ぼくとは全然違うな、とはじめは大田を遠くに感じていた。でも、本気を出して負けるのが嫌で、はじめからチャレンジもしないであきらめてしまうところはぼくの中にもあって、なかなか本気で駅伝に向き合えない大田の気持ちも痛いほど分かった。負ける理由がほしくなる気持ちも、だれかのせいにして本気で向き合えない気持ちも、本当によく分かった。三区のジローにたすきを渡すころには、大田に親近感を覚えるようになっていた。

三区。ジローほどいいやつはいないとぼくは思う。だれかがやらなければいけないけれど、だれも引き受けないようなことを、ジローはいつでも引き受ける。ぼくに、そんな行動

力はない。やりたくないことは、できればやりたくない。避けられるものなら、避けて通りたい。「頼まれたら断るな」というジローのお母さんの言葉がぼくに刺さる。ぼくはジローを尊敬する。だからこそぼくは、ジローを心から応援した本を握る手に思わず力が入ったほどに。

四区。吹奏楽部の渡部だ。吹奏楽部、というところに、ぼくは引っかけを感じた。ぼくが入部を迷った吹奏楽部。陸上部に入部したことに後悔はしていないけれど、それでも何となく吹奏楽部に所属している渡部が心に引っかけた。サックスなんか吹きながら、榊井たちの誘いを、嫌みたっぷりな言葉であつさり断る渡部のことは、少し嫌いだつた。それでも、祖母と二人で暮らしていることや、友達をさりげなく助けるといった行動に触れ、いつの間にかぼくは渡部を受け入れていた。それどころか、渡部ならきつとやつてくれる、という信頼さえ芽生えていた。

五区。当日になって走順が入れ替わって、俊介が走る事になった。ぼくは、記録会で当日になって突然リレーを走ることになった自分を重ねた。走順が変わることの重大さは、走る人にしか分からない。どれだけ不安だつたらう。でも、ぼくがレーンに立つたときと同じように、きつと俊介もスタートラインに立つた瞬間に、不安など吹き飛んで、ただただ走ることに集中したに違いない。俊介はまだ二年生だから、きつと来年の駅伝は、アンカーを務めるはずだ。ぼくは、俊介をこれからも応援する。

六区。調子の上がらないキャプテン。駅伝に人一倍の思いをもってメンバーを集めたキャプテン。ぼくの想像を超える辛さがあつたに違いない。でも、榊井は走る。言い訳なんかせずに、ひたすら走る。五人がつかないだたすきを受けて、ゴールを目指す。ぼくは、榊井のようになれるだろうか。自分の気持ちをコントロールすることの難しさは、中学生になつて嫌というほど感じている。それを榊井は、ぼくの目の前で見事にやつてのけた。県大会出場というみんなの思いを背負つて。人のせいにならず、病気のせいにならず、結果を残したことに、ぼくの心はふるえた。

ぼくは、六人のメンバーに、陸上への向き合い方について課題を突きつけられた気がした。以前の榊井のように、ぼくは陸上をチームスポーツと思っていないところがあつた。でも、今は違う。陸上もまたチームスポーツだ。種目は何であれ、仲間がいる。部員一人一人に思いがある。仲間の思いがチーム力になるのだと、ぼくは市野中学校の駅伝メンバーに教わつた。

今のぼくは、陸上部に入部したことに一点の後悔もない。ぼくは、これからもひたむきにゴールを目指して走る。仲間と、一緒に。

たとえ人に馬鹿にされても

弘前大学教育学部附属中学校

長谷川 統 也

対象作品／椎野直弥著『僕は上手にしゃべれない』ポプラ社

皆さんはこの本のタイトル、『僕は上手にしゃべれない』を見てどう思いましたか。自分は、上手に喋れないというのは、なぜ上手に喋れないのか、なにかの病気なのではと、本の題名を読んだだけでは疑問がたくさんあり、よくわかりませんでした。この本は家の本棚にありました。なんと色々な本を見ていると、一冊だけなんか題名が変わっているなという本を見つけました。気になったので手に取ってこの本を読むことにしました。

小学生の時から吃音という医学的には発達障害に当てはまる病に悩む主人公の柏崎悠太は、中学校でもみんなに馬鹿にされるのではと思います、中学校初日の自己紹介の時から仮病を使って教室から逃げ出してしまうんです。しかし、吃音をなんとしてでも直したいという思いから、「誰でも上手に声が出せるようになります」という部活動誘いのチラシの言葉にひかれて放送部に入部します。クラスメイトで同じ放送部の古部

さんや、優しい放送部の立花先輩、姉、クラスの担任の椎名

先生などの多くの人に助けられながら、少しずつ変わっていき悠太の成長の物語です。

僕が、この作品を読んで一番はじめに思ったことは、悠太と僕は似ているということです。僕は吃音ではないけれど、自分の伝えたいことがなかなか伝えられないときや、話し始めに「ここここにちは」みたいに、緊張するようになってしまふときがあります。僕は気づいた頃から滑舌が悪く、小さい頃色々な人にかかわられて、「何言ってるのか全然わからない」と言われたことがあります。その時の気持ちや悠太の苦しみと似ていて、「なんでうまく喋れないんだ。」という悲しみと、「どうして馬鹿にするんだよ。」という怒りがありました。こういう経験があったため、悠太の悩みや苦しみに深く共感しました。

この本で一番心に残った場面は、弁論大会で悠太が吃音について発表している場面です。最初は喋ることが嫌いで自己紹介の時から逃げ出していた悠太が、弁論大会で発表できる

くらいまで成長したというところに感動しました。くじけても何回でも立ち上がり、ふてくされるような変な方向に行っても戻ってくるのができたからこそ、悠太は成長できたのだと思います。悠太の発表が始まり、出だしの言葉が言えず会場がざわついた時、立花先輩とお姉ちゃんが静かにさせてくれたところも心に残りました。たとえその人にどんな事情があろうと、関わり方は全員と一緒という、当たり前だけになかなかできないことができていたので、僕もこういう人になれたらいいなと思いました。最終的に、悠太は弁論大会でなんと賞にはいることができ、話すことが苦手な人でも、努力したらよい結果がまつているということに気づかされました。

この本で心に残った言葉は、立花先輩が言った「会話って自分の意思や考えを相手に伝えるためにするものだろう？」という言葉です。ちゃんと意思疎通ができる悠太との会話は、なんの問題もないから安心してと声をかけてあげたのはビックリしました。そして、この先輩は優しすぎると思いました。いくら優しい人とはいえ、遠慮して関わるのが普通だと思っ

ていたのですが、立花先輩は思っていることが伝わるだけでいいと、吃音に対してなんの差別の感情も持たなかったのが尊敬に値すると思いました。相手のことを考えずに自分の思ったことを率直に伝えつつ、遠慮もせずこのように相手が言われて安心することを言える人が、真の優しい人だということがわかりました。

この本を読んでわかったことは、努力と助け合いが大切だということ です。悠太は吃音から目を離さず、ずっと嫌でも付き合ってきたという努力がありました。そして周りの人がそれをサポートし、その努力を無駄にせず最後まで付き合い、優しい助けを出すというこの二つが大切だということがわかりました。だから、これが自然にできるようになりたいと思います。

これから、苦しいことがあつて、どうしようもなくなつてしまふときがあるかもしれません。それでも変わらないう見守り支え続けてくれている家族や仲間がいるということを心にとめ、胸を張って堂々と自分の個性を出し切つて生きていきたいです。

死んでしまった人に会えたなら

弘前大学教育学部附属中学校

日ヶ久保 乃愛

私は「死んだ人にもう一度会いたい」とは思わない。もし、

死んでしまった人にもう一度会ってしまったら、落ちついたはずの悲しみがまたこみあげてきてしまう。それに、もう絶対に会うことはできないのに、もしかしたら、もう一度会えるのではないかと期待し続け、現実を受け入れることができなくなってしまうかもしれない。私はそうなってしまうことが怖いから、やはり死んだ人にもう一度会いたいとは思わない。そんな私がこの本と出会うきっかけになったのは、この小説の作者である辻村深月さんの『かがみの孤城』という小説を探していた時、同じ本棚に置かれていたこの本が目に入ったからだ。この本の裏表紙に書いてあった「死者と再会する」という言葉を見て、死者と会うことなんてできるのだろうか、どんな方法を使えば再会することができるのだろうか、と疑問に思った。この本は、死んでしまった親しい人に対して心残りがある四人の人たちが、ツナグという死者と生者を繋ぐ役割をもつ青年を介して、死者に一晩だけ再会すること

ができるという連作短編小説だ。

その中で、私が一番考えさせられた話は、「親友の心得」だった。死んでしまった同じ演劇部のライバルだった親友に会いたいと願う女子高生の話だ。この女子高生は、ライバルである親友に主役の座を奪われて嫉妬し、冬の通学路に水を流し、事故に遭わせようとした。この女子高生は、なぜここまで嫉妬してしまったのか考えた。おそらく手が届きそうな相手であり、今まで自分と大して差がなかったからだろう。私に通っていた小学校では、年に一度、学年の男女に分かれてマラソン大会があった。八位までが入賞なのだが、私は九位だった。同じ年齢で私と大きく違わないはずなのに、なぜ私より速いのだろうと思ひ、すごく悔しかったことを今でも覚えていいる。私は、誰かに向けて何かを企んだことはなかったが、その時の嫉妬心はとても大きなものであったと思ひている。この話の中の女子高生も、ライバルの親友に大きな嫉妬心があったからこそ、行動やその後の後悔も大きくなって

しまったのではないだろうか。

私はまだ身近な人の死に直面したことがない。そこで私は母と祖母に会いたい人がいるか聞いてみることにした。すると、母も祖母も会いたい人がいると言った。詳しく話を聞いてみると、母は若くしてがんで死んでしまった親友に、祖母は私の曾祖母、つまり祖母の母に会いたいと言った。やはり、身近な人が死んだ経験があると、会いたい人となるのだろうか。それなら私も大人になれば、会いたい人が思い浮かぶようになるのだろうか。

私が住む青森県の恐山には、「イタコ」という名の女性の霊媒師がいるそうだ。ツナグとはまた違う方法だが、死者の霊を自らにひょう依させて、死者の代わりに言葉を語る口寄せという方法で、死者と交信することができるそうだ。ここにも、ツナグと同じように死者に伝えたいことがある人や、聞きたいことがある人が訪れるそうだ。

私の身近な人がもし死んでしまった時、私はどうするだろうか。私は、後悔に似た気持ちになるだろう。あの時自分がこうしていたら、あの人さえいなければと、自分や他人を責めるかもしれない。こう考えていくと、なぜ死者ともう一度会いたくなるのか分かってきた気がする。もう一度会うこと

によって、大切な人が亡くなったことで空いてしまった心の穴が埋まり、また前を向いて生きていこうという、きつかけになるのかもしれないと思った。もしかすると、この本の登場人物たちにとって、ツナグは悲しみの中の希望となっていたのかもしれない。

この本を読んでいくにつれ、最初の考えと、今の考えは少し変わってきた。最初は、なぜこの本の登場人物たちは、死んでしまった人たちに会いたいと考えたのだろうかと疑問に思っていたが、この本の登場人物たちはツナグに依頼することで、心の中にあつた気持ちを整理し、次に進めるようになっていると感じた。ツナグには、死者と会わせるだけではなく大切な役割があつたのだと思う。死者との会話は、今後の人生でその人の価値観を変えたり、会話の後には幸せだけでなく、ときには苦い学びを残したりする。亡くなった人との関わりを思い起こすことは、自分の過ちを思い出させるだけではなく、自分の生き方を見つめ直す機会になると、ことなのではないだろうか。私は今、生きている人間として、死という言葉に目を背けず、堂々とした最期をむかえられるような後悔のない人生を送ろうと考えた。

太宰の生き方に触れて

弘前市立南中学校

齋藤 天菜

この夏、私は好きな文豪である太宰治の『人間失格』を選びました。太宰が大庭葉蔵の手記の形式で、どのように自己の生涯を綴つづっているのか興味をもって読み始めました。

物語の中で、特に印象に残り、深く考えさせられた場面があります。それは、

「咳き込んで口をハンカチで抑え込んでいたところに赤い靂あられが降せったみたいに血がついていた。けれど、その血は喉からではなく耳の下の小さいおできをいじってついた血でした。」

という場面です。ハンカチの血を使って起訴ができないようにしようとしたのではないかと私は思いました。また、利用できるものはすべて利用して嘘うそをつき通そうとする太宰の姿を見て、同じような状況下で太宰と同じような行動をとるのではないかと考えました。誰でもこの本能には逆らえないのですから。

もう一つは、

「そこで考え出したのは道化でした。それは、自分の、人間に対する最後の求愛でした。」

という場面です。理由は、自分を見失い、話すことさえ困難な状況で考え出した「道化」というものにおどろいたからです。私なら会話すら困難だったら、最初から話さずにいるでしょう。でも、太宰が導きだした答えは道化でした。どうしてそこまでして自分をとり繕おうとするのか理解が困難でした。ですが、太宰からみてみれば、自分の一番の生存ルートだったのかもしれませんが、でも、やはり、どうしてそこまでしているのかわかりません。

この小説を読む前は、太宰治の人生を綴っているだけなのに、なぜ題名が『人間失格』なのか疑問でした。でも、読み終わる頃には印象がガラッと変わりました。太宰は道化をしている時点で、人間失格している。女性と心中、自殺未遂をくり返している点からみても人間失格。また、単なる自分の人生だけでなく、相手の心情も、自分の心情のこまかい

部分まで綴られており、ざっくりとした感想を述べることは難しいと感じました。また、やはり太宰が他の人とは違うこともわかりました。太宰は、自分をあくまで他人事としてとらえているのです。文末表現が「だったらしい」などとなっており、他の人のことを語るような言いまわしが見られませんでした。太宰は本当に自分を見失い、道化をするしかないと思ひこんでいたのだと思います。だから、自分のことを他人事のように語るしかなかったのです。学校でも、家でも、ましてや友達にさえも道化として振る舞っていたのなら、そこまで突き通せるのがすごいと思いました。太宰治だからできたのです。

最後に、この小説と出会って学んだことは、自分のことは自分で主張すること、物事を深く考えすぎないことです。自分で主張することは誰だつて経験することです。太宰は自分で主張できなかつたから、最終的には道化という選択をすることになってしまいます。だから、自分の思ったこと

は主張することが大事だと思いました。でも、あまり思ったことをスバズバ言いきると、相手の癩しびに障ることだつてあります。まずは自分の思いを大切に、少しずつでも主張していくことが大事だと思いました。また、物事を深く考えすぎないことは、今の私にすごく必要だと思っています。普段から深く考えすぎてしまうため、空回りすることが多くあります。深入りせず、少しだけ樂觀視していくのがいいと思います。太宰は物事を深く考えるくせがあつたと思います。だから、恐怖心におおわれ、自殺未遂をくり返していたのだと思います。太宰の姿から、物事を深く考えすぎず、あまりに樂觀視しすぎないことを学びました。太宰治は少しづつ、内側から壊れていっていたのでしょう。とするなら、人間も同じように内側から壊れていくのではないか、天才と狂人が紙一重と言われるのも、ここに理由があるのではないかと感じました。自分の価値観が、社会一般の価値観とはずれているという太宰の考え方に影響を受けました。

「違い」への向き合い方

弘前市立第五中学校

八木 利 彩

私は中学校生活がとても充実している。喧嘩けんかしても言い合いが言い合える友達、何でもないことで一緒に大笑いする友達、いつまでも話をきいてくれる友達。仲間が私の近くにいることができるのが、私の毎日が充実している一番大きい理由だと感じている。

表紙に描かれた高校生五人。どこにでもあるような教室。『かくしごと』と『』という不思議な本の題名。本を開くと、自分が経験したことがあるような場面が出てきた。言葉にできなかったその時の自分の感情と重ねていた。

この本の登場人物は、特別な能力を持っている。人の心の動きや感情を、数学や記号で知ることができる。そして、その能力を隠しながら生活している。その力のせいで、自分の振舞い方や相手の気持ち之余計に考えてしまう。自分に自信が無い僕、ヒロインよりもヒーローになりたいミッキー、不思議な言動をして周囲を和ませるバラ、明るくて運動が好きなツカ、大人しくて控えめなエル。全く共通点が無さそうな

「違い」を持った五人が向き合い、ぶつかり合い、認め合い、絆きずなを深め成長していく。

この本の中に「皆、何を知って色々な人を好きになるんだろ」という一文があった。私の友達はみんなそれぞれの個性を持っている。みんな一人一人違うけれど、全員大好きで大切な人だ。共通しているとすれば、「優しさ」を持っていることだと思っ。いつも笑顔で声をかけてくれる。どんなときでも隣にいてくれる。ありのままの私を認めてくれる存在だと思っている。

一方で、「違い」を理由に傷ついている人がいることも事実だ。

七月十二日、タレントのryuchellさんが自ら命を絶った。心と体の性が異なるトランスジェンダーであることを公表し活動していた。LGBTQへの理解がまだ十分ではない中、自分らしく生きる姿は、たくさんの勇氣や希望を与えていた。ryuchellさんが死を選んだ理由の一つと

して、誹謗中傷が考えられている。自分らしく人生の生き方を決めること、人生の選択をすることを、なぜ責められなければならないけなかったのか。その人らしさを認めることができない、あまりにも幼稚な考え方から生まれた言葉のナイフで、ryuchellさんは殺害されたのだと思った。

自分らしく生きるとは、自分の気持ちに正直に生きていくこと。他人の評価を気にすることなく、自分の楽しいと思う事や、やりたい事を自ら選択していく生き方という。それに多数派や少数派はない。正解も不正解もない。邪魔をする権利は誰にもない。

全ての人が自分らしく生きていくためにはどうしたらよいのか。

口ぐせのように「普通」と言う人に対して、私は違和感を持つている。「普通」とは、ごくありふれたものであることだ。この地球には八〇億を超える人が暮らしている。同時に八〇億を超える自分らしさが存在している。全ての人を、全ての自分らしさを知って言っているのか。何を知って「普通」という言葉を使っているのか。きっと、その人自身しか入れないようなせまい世界での「普通」なのだろう。「普通」に縛られず、自分の世界を広げていくべきだ。一人一人が考

え方を変えていくことが必要だと思う。

五人の主人公の「違い」はそれぞれの良さであり、自分を成長させる素晴らしいものだった。そう感じさせられるのは、五人が「違い」を受け入れていたからだ。「違い」はどう向き合うかで形が変化する。「違い」を知ろうとしなければ、人と人を隔てる壁になる。否定すれば、人を傷つける凶器になる。そして、五人のように「違い」を受け入れれば、人と人とを結びつける糸になる。この糸が全ての人をつなぎ、誰もが自分らしく笑っていられる未来を紡いでいくことを願っている。

私は価値観が違う人であっても、「違い」を知って、相手らしさを認められる人になっていきたい。そして、その良さを自分に取り入れていきたい。もしも誰かが「違い」を理由に私の大切な人を傷つけたら、それは間違っていると抗議できる強さを持つ人になりたい。

「違い」は何のためにあるのだろうか。私は助け合うためだと思ふ。完璧な人なんていない。みんな足りない部分を持つている。それを補い合うために「違い」がある。個性が尊重され、認められる世界。私もその世界をつくる一員でありたい。

『アルジャーノンに花束を』

弘前大学教育学部附属中学校

伴 駿斗

『アルジャーノンに花束を』は、知的障害を抱える主人公チャーリーが実験的手術により、知能を高め、普通の人と同じような生活を送るようになってからの人間関係や、苦悩を描いた物語です。

物語の主人公であるチャーリー・ゴードンは、三三歳になつても幼児並みの知能しかない知的障害を抱えていました。ある日、そんな彼のもとに、頭をよくする手術という夢のような話が舞い込みます。彼はその話に飛びつき、手術は無事成功します。そして日を重ねるごとに彼は天才へと変わっていきます。

しかし、賢くなることはいいことだけではありませんでした。賢くなったことで、ずっと友達だと思っていた周りの人が自分のことを馬鹿にし、笑っていたことに気づいたとき、人を疑い始め、人を心から信用できなくなってしまう。私も似たような経験があり、友達だと思っていた人が裏で陰口を言っていたということがありました。私はそのとき、怒

りや悲しみなどでいっぱいになり、同時に他の人も、もしかしたら陰口を言っているのかもしれないと思いました。そうした経験から、私はかなりチャーリーに同情することがありました。

「僕の知能が低かったときは、友達が太勢いた。今は一人もいない」

周囲の人の自分を見る目が変わり、みんながあまりチャーリーと関わらないようになります。それでもチャーリーはたくさん悩み、迷いながらも少しずつ前に進んでいきます。

私が特に印象に残ったのは、チャーリーが成長していく過程での苦悩や孤独感に対する描写です。彼が過去の自分を思い出し、知り、同時に理解できずに苦しむ姿や、周囲の人々の彼を見る目が変わってしまうことに苦しんでいる姿に、とても同情し、胸が痛くなりました。チャーリーは手術をする前、とても素直で、みんなが何を笑っているのかもわからず、一緒に笑っていました。私は本を読みながら、もしかしたら、

チャーターは手術をしなければ良かったのかもしれないと何
度も思いました。純粋で素直なチャーターは、疑うことを知
らず毎日楽しそうにしていたからです。

私はこの本を読んで、知能について深く考えさせられまし
た。自分は知能を持っているのが「普通」、そして知的障害
者については「可哀想」という考えをいつのまにか持つてい
ることに気が付きました。しかし、その考えはとても恥ずか
しい考えだと知りました。知的障害を持つていてもそのこと
を気にせず、前向きに自分の人生を歩んでいる人が、この世
の中にはたくさんいるということがわかったからです。ま
た、チャーターが言った言葉の中に、「人間的な愛情の裏打
ちのない知能や教育なんてなんの値打ちもない」というもの
があります。人間として本当に大切なものは知能などではな
く、他人を思いやる気持ちや愛情なのではないかと私は考え

ました。なぜなら、私の周りでも、頭はあまり良くないがと
ても幸せそうな人たちがいて、その人たちに共通しているの
は、誰に対しても愛情を持つて接していることだったからで
す。

現在の世の中は、知的障害者の方たちに対する社会的な理
解や配慮が十分ではなく、知的障害を持つ人々に対する偏見
や差別などが、まだいろいろなところで起こっています。そ
して、いつ、誰が、急に障害を持つてしまうかはわかりませ
ん。だからこそ一人でも多くの人が今一度このことを考え、
理解し、差別や偏見がなくなつてほしいと思いました。

私はこの作品を読んで知能についてや障害を持つ人につい
ても深く考えさせられ、たくさんのことを学びました。
これからは私がこの本から学んだことを生かし、人間は愛情
が大事ということを多くの人に伝えていきたいです。

中学校二年の部 佳作

過去へタイムスリップ

弘前大学教育学部附属中学校

品川碧海

対象作品／木下史青著『博物館へ行こう』岩波書店

僕は、夏休みにつがる市にある「縄文住居展示資料館（カ

ルコ）」と、岩手県盛岡市にある「もりおか歴史文化館」に

行きました。カルコでは、^土竪穴住居と遮光器土偶と人骨等を見学しました。この人骨は本物で、縄文時代のものを発掘されたままの形で展示していて、見てはいけないものを見たような衝撃を受けました。もりおか歴史文化館では、昔の盛岡の風景がミニチュアで展示されていました。南部藩時代に使っていた着物、^{ちやう}甲冑、日本刀等がピカピカと、とてもきれいな状態で展示されていました。

今回、読書感想文を書くために、何の本を読もうか考えながら、国語の教科書を見てみると、『博物館へ行こう』という本を見つけました。夏休みに資料館や文化館に行った自分にピッタリな本だと思い、図書館から借りて読むことにしました。

筆者は、東京国立博物館の展示デザイナーの木下史青さんです。展示デザイナーとは、僕たちが博物館に行ったときに、絵画や彫刻、土器や埴輪^{はにわ}などと出会う場づくりのためのデザインをする仕事だそうです。この本には、一般にはあまり紹介されることが少ない博物館の裏側の仕事について、たくさん書かれてありました。「これはなんだろう」「どこで発見されたのか」「だれがどうやってつくったのか」「どんな価値があるのか」、色々な疑問から学術研究が始まるそうです。そして、モノを「分類」し、「名づけ」るのが仕事の基本だそうです。博物館では常に、分類の仕方、名前のつけ方をめぐって議論があることを初めて知りました。

木下さんは、二〇〇〇年の「土器の造形・縄文の動・弥生の静」という展覧会が印象深かったそうです。展示品が東北から九州まで、全国から三〇〇点以上集められたそうです。展覧会をみる人には、縄文時代・弥生時代までタイムスリップした気分になつてもらいたいと工夫をしたそうです。夏休みに僕が行ったカルコでは、竪穴住居を通り抜けると遮光器土偶がありました。竪穴住居がタイムトンネルの役割をして

いたと思います。そして、現代からタイムスリップして、縄文時代の土偶に出会うという体験をしたのだと気づきました。筆者は、自分を取りもどしたいときに美術館、博物館に行つたそうです。「モノをみてぼんやりすればいい。目の前にはこんなに美しいものがあるじゃないか。」と、心の目が開いてくるそうです。博物館に行つた時には、なぜだかほつとするような、お気に入りの場所を探してみるのもおすすめです。この本は、今まで知らなかった博物館の楽しみ方を教えてくれる内容でいっぱいでした。

僕は、この中で驚いたところがたくさんありました。一つは、東京国立博物館では、国宝や重要文化財の絵巻物や掛軸は、「一年間に四週間しか展示してはならない」という決まりがあることです。このようにして文化財が大切に守られているんだなと思いました。もう一つは、空気の管理についてです。鉄は空気中の酸素と結合すると錆びます。銀も放つておくと、黒くなつてしまいます。大刀も、ただ置いてお

くだけでは文字や文様が見えなくなってしまう。そこで、大刀専用のケースに入れるそうです。ケース内は窒素濃度九九・九八%以上を保っているそうです。ケースの中の空気も管理されていることが分かり驚きました。

八月七日のニュースで、東京の国立科学博物館で標本や資料を保存する資金が不足しているため、一億円を目標に寄付を募るクラウドファンディング（CF）を始めたという話題になりました。そして、翌朝の新聞に「CF開始九時間二十分で見標を超える金額が集まった」と書かれてありました。みんな協力し、文化財を守ることができ良かったと思いました。

中学校二年の部 佳作

『岡本太郎の眼』

弘前市立相馬中学校

石 岡 南 樹

私は『岡本太郎の眼』という本を選びました。その理由は、私が美術関係の将来を一年生の頃目指していたときに、校長先生のご退職されるということで似顔絵を描かせていただき、そのお礼でいただいて非常に感銘を受けたからです。岡本太郎さんは、その校長先生の恩師の恩師とのことで私も受けつ

最後に僕がこの本の中で、一番印象に残ったところは、「博物館でモノをみるときに、想像力はとても大事だ。せっかくホンモノを目の前にしているのだから、想像力をはたらかせよう。」と書いてあったところです。なぜなら、僕は博物館に行っても今まであまり想像力をはたらかせて展示物を見たことがなかったからです。これからは、博物館に行ったときには、気になったモノの前に立ち止まり、じっと見つめてその時代に心を馳せ、想像力をはたかせたいと思いました。

対象作品／岡本太郎著『岡本太郎の眼』KADOKAWA

いできたいと感じました。この本は、岡本太郎さんの文学作品がたくさんまとめられていて、彼の生き方や価値観などを感じさせられ、考えさせられ、考え直させられるそんな作品です。

この本について、特に印象に残った場面が三つあります。

一つ目は、「本職は生きること」です。これは読んだときに岡本太郎さんの不思議さをいきなり感じました。ある人に、「あなたは絵描きでありながら、さかんに文章も書くし、いったいどっちが本職ですか」と問われ、「本職などありません。どうしても本職というのなら人間ですかね」と会話する場面です。この場面は、誰かにほこれる職をたくさん持っているはずなのに、と疑問に思っていました。私は将来、「芸術家です」と胸を張って言えるようになりたいと考えていましたが、この話を読み、考えが変わった気がするのです。それは、岡本太郎さんのように生きがいを持って猛烈に生きること。夢にたどりつくことがゴールではなく、そこにいたるまでも、その後も内に秘めるものをつき出していき、そのときこそ一番生きている、すなわちゴールなのだと思います。ときどき自分を見失うときがあります。そんなときこそ色々な問題に全力で体当たりしていく、それが人生なのだときと教えてくれたのだと思っています。

二つ目は、「子供が描いているのは「絵」ではない」です。話は子どもに対する疑問から始まります。仲間が外で面白そうに遊んでいるのに、一人でわき目もふらずに絵を描いたりする。おいしいお菓子がそばにあってもふり向きさえせず描き続けている。そこに情熱を感じる、そんな話です。ここを選択したのは、いつから自分の好きな絵を描かなくなってしまうのかと自分自身で感じたからです。私が小学生

の頃、友達に頼まれて絵を描いたり、好きな絵を模写したりと何かにとらわれていたと思います。保育園児の頃は、紙に丸か三角かも分からない線を力いっぱい描きまくっていた。それを鑑賞したりもしないし、評価したりもしなかった。それは、そのときの感情を爆発させ、紙にそれを乗せていたからだろうと感じます。私はまだまだ幼いと思っていたが、心はもう大人直前あたりまで来ていると思います。それを子供にかえるには、それほど精神力が必要ですが、人間内には子どもの頃のような純粹さがある。それを放出させて、何ごとにもぶつかっていくようになるっていいと思います。

三つ目は、「老熟」と「青春」です。これは、日本の運命がなっている青春の意味を考えていく話です。「子供が描いているのは「絵」ではない」、では、子どものように純粹な心でたくさんの方に突っ込んでいくことが大切だと言った。そのように大人のような感情で成長した人には、青春は美しい思い出であり、心の傷の一つであるかもしれない。しかし、それとは違う青春があると言います。激しく現実につぶかっている人間の心の奥には、いつでも若い情熱が瞬間瞬間にわき上がっている。人間の内にあって、精神の若さと肉体の若さは猛烈に交流し、侵入しあっている。そういった流動的な状況が青春なのだと感じます。子どものような純粹な心というのは、自分の胸を走り続ける青春なのかもしれないと思います。私は青春のまっただなかにいます。年齢に固

着して考えずに、強力な精神力で現在に生きていきたいと思
います。

この本を通して、私は岡本太郎さんのような人間性などを

考えながら生きていくことの重要性を学びました。今後、夢
に向かって進んで行くと思いますが、純粋な心で突っ込みた
いです。

中学校二年の部 佳作

対象作品／アンヌ・スヴェルトルップ・ティエゲソン著『昆虫の惑星』辰巳出版

地球と人類の救世主

弘前市立第一中学校

伊藤 快人

「みなさん、昆虫は好きですか」

私は昆虫が大好きです。そんな私に母が薦めてくれたのは、

『昆虫の惑星』という本でした。タイトルと表紙のデザイン
にひかれて一心不乱に読みました。

地球上には膨大な数の昆虫がいます。私たちが普段生活し
ている間にも、昆虫たちはせつせと活動し続けています。こ
の本では、そんな昆虫たちの世界を、彼らの体の仕組みや他
の生き物とのつながりや人間との関わりなどと交えて紹介し
ています。

さて、みなさんは環境問題と聞くと何が思いつきますか。

私はプラスチックごみの問題が真っ先に思い浮かびます。近
年、プラスチックごみの量を減らそうと意識が高まってきて

いますが、まだまだリサイクル率が低いのが現実です。その
問題を解決してくれる昆虫がいます。それはミールワームで
す。彼らはプラスチックを餌にして食べることを初めて知り
ました。厳密には、彼らの腸内細菌が分解するそうです。救
世主のような彼らも水が苦手なので、海洋プラスチックを分
解できないことが残念でなりません。これから研究が進んで、
海洋プラスチックごみの問題を解決できる突破口が見つかる
ことを願いつつ、私たち人間も、ごみを減らす努力をし続け
なければいけないと考えました。

他にも驚く能力を持った昆虫たちがいます。膿うみと死んだ組
織だけを食べるウジ。あまり人に好かれない昆虫ですが、傷
の治りを早めることができます。抗生物質ができてからはあ

まり注目されなくなりましたが、最近では複数の薬剤に耐性をもつ細菌が現れたことで、再び脚光を浴びているようです。副作用もなく、細菌の繁殖を抑える物質や、新しい組織の成長を促す物質を出すこともできる能力も持っているため、これからの活躍にとても期待できる昆虫だと思います。

すでに医学の分野で、六回もノーベル賞に貢献している昆虫もいます。シヨウジョウバエです。こちらもあり好かれるタイプではありませんが意外なことに、彼らは人間と遺伝子配列に共通点が多く、医学の研究に我が身を提供してくれました。今日、私たちが元気に過ごしているのも彼らのおかげと思ふと感謝でいっぱいになります。

人間に嫌われる代表格といえばゴキブリかと思えます。ゴキブリは放射能に強いし、耐久力があり、とても頑丈な体とずば抜けた運動神経の持ち主です。この能力を人命救助に生かす研究があります。日本は地震大国であり、近年、自然災害も増加しています。人間が入り込めないような場所で彼らが活躍する日がくるかもしれないと思うと、あまり嫌わないでほしいと思います。

このように、人間に嫌われながらも人間のために能力を提供してくれる昆虫たちは私は尊敬します。感謝もしています。虫が苦手な人は多いかもしれませんが、果物やチョコレー

ト、はちみつが苦手な人は少ないかと思えます。昆虫が受粉してくれるおかげで私たちは食べることができます。人工授粉の作業効率は、昆虫には到底およびません。他の生き物の死がいやふんなども処理してくれる昆虫たちがいてくれるおかげで、私は地球で暮らしていけるということを忘れてはいけません。自分たちの豊かさだけを求めて、このけなげな働き者たちのすみかを奪っていることが非常に悲しいです。木を伐採、乱獲などで昆虫が減ることが、結果自分たちを追い込んでいくことを今一度考えてほしいと思います。

私は『昆虫の惑星』を読んで、改めて昆虫の体の仕組みや能力の素晴らしさに感動しました。そして、昆虫がしれつな生存競争を繰り広げ、子孫を残すために植物と知恵比べをしながら生態系を維持していること、小さな昆虫たちの大きな働きが、人間にたくさんのお恵みを与えてくれることに感謝しています。

「昆虫は好きですか」

昆虫たちを見た目が気に入らない、人間にとって不都合という理由だけで排除するのではなく、私たち人間にとって同じ地球に住む大切なパートナーということを知ってもらうためにも、この本を一人でも多くの人に読んでほしいと思います。

『青春ゲシユタルト崩壊』を読んで

弘前市立南中学校

三戸 愛 瑠

「青年期失顔症」という初めて聞く言葉。青年期に個性を殺し、自分を見失うことが強いストレスになると発症するらしい。自分自身の顔が認識できなくなり、のっぺらぼうのように見える。これは作者の架空の症状らしいが、とても興味がわき、読んでみることにした。

主人公は朝葉という高校生だ。勉強も部活も要領よくこなす優等生だが、部員の仲を取りもつ日々を過ごすうちに本音を飲みこむことに慣れ、自分の意見を見失ってしまった。そんなある日、朝葉は「青年期失顔症」になってしまふ。それを知った同級生の聖は、

「疲れたら休んでもいいんじゃないの。」

と言って、朝葉を学校から連れ出してくれた。聖のおかげで笑顔をとり戻した朝葉が、自分が本当にやりたいことや好きなことを見つけたと見つけはじめるといふ物語だ。

この話の中で心に残った場面が二つある。まずは、朝葉が悩んでいるときに聖が学校から昔懐かしい駄菓子屋へ連れ出

したところだ。小学生の頃の二人の記憶を語り合ったことで朝葉は気分転換ができ、気が楽になったのではないかと思った。ずっと同じところに留まらずに違うことを試してみることで、気分がリセットされると考える。

次に、朝葉の後輩の中条さんと、保健室の叶ちゃん先生の案で「青失部」を立ち上げようとしているところだ。中条さんも朝葉と同じ青年期失顔症で、青年期失顔症に関する悩み相談が出来る部活をつくろうとしていたが、苦痛だった部活をやつとやめられた朝葉にとつて、別の部活への入部は気が進まないだろうと聖が心配した。でも朝葉は、

「自分みたいに発症して悩んでいる人の力になれるならやってみたいなつて思う。それに青年期失顔症をもつとよく理解するために勉強してみたい。」

と、今までの朝葉なら考えられないほど前向きで真つ直ぐな発言をした。それは朝葉の心情が変化した証拠だと思つた。きっかけは聖や叶ちゃん先生だったが、朝葉が自分の意思で

行動できるようになったのは、紛れもなく朝葉自身のおかげである。

学生である私たちは、学校という狭い水槽の中で流れるように泳ぎ続けている。でも、学校というのは人生の一部にしか過ぎない。世界はもつと広いことを考えると気が軽くなるのではないか。私も、時々この狭い水槽から早く出て、広い世界に行きたいと考える。友達がいらないとんだか心細い。でも、気を遣って疲れることもある。本音を言うのはなかなか緊張するけど、飲みこんでばかりだと自分が自分でなくなってしまうような気もする。どうしたらいいんだろう。みんなどうまくやっていききたいけど、本当にみんなどうまくやっていく必要があるのか。悩む。

この物語を読んで少しわかったのは、自分の意思で行動することの大切さだ。そして、まちがうかもしれないけど、一歩前に踏み出す勇気の大切さだ。他人がどう思うかにばかり気を取られずに、自分がどうしたいかを忘れないことだ。そして、それをちゃんと伝えられるようにすることだ。

きつと自分と同じように、悩んだり立ち止まったりしている人はまわりにたくさんいるはずだ。朝葉はまわりの人たちの力を借りて、自分の意思で行動できるようになった。私も、助け、助けられながら、自分を見失わないように生きていきたい。この夏、この『青春ゲシユタルト崩壊』から学んだことを忘れないようにしていきたい。

老人と僕

弘前市立東中学校

千葉晴 登

対象作品／ヘミングウェイ著『老人と海』新潮社

今年の七月、中学生として最後の大会があった。それまでずっと東北大会出場を目指して練習に励んできたのに、僕は自分の力を出し切れず、あっさりと負けてしまった。これまでの人生の中で、最大級の悔しさを味わい、僕の部活動は幕を閉じた。生活の大半を占めていた部活動がなくなり、悶々（もんもん）と過ごしていた時に出会った本が、この『老人と海』である。ノーベル文学賞を受賞した有名な作家ヘミングウェイの作品だし、題名が夏っぽいし、表紙がかっこいいし……それくらいの軽い気持ちで読み始めた。

この話はある老いた漁師が八十四日間の不漁の末、三日にわたる死闘を繰り広げてようやく大魚を捕らえたにもかかわらず、港へ向かう帰路で獲物をサメに食われてしまう、というものだ。読み終えた後、老人と僕との共通点を見つけた。それは、「長い時間諦めずに挑み続けてきたのに、「良い結果が得られなかった」ことである。この老人は、大魚をものにするまで実に忍耐強く努力を重ねている。しかもたった一人

で……捕らえた大魚の抵抗を弱めるために綱をたぐって手を切り、大魚に引つ張られて舟上に倒れ、満足に飲食することもできず、さらに昼間は灼熱の太陽に、夜には寒さにさらされても、老人は決して大魚を仕留めることを諦めないのだ。また、仕留めた大魚を狙ってサメが何匹も現れては大魚を食らうのだが、それでも老人はサメと必死に闘い、大魚を守ろうとする。努力の甲斐なく、港に着く頃には大魚はほぼ骨だけの状態になってしまふのだが、老人は決して大魚を放そうとはしなかった。大魚を放せば、サメに襲われるリスクを回避できたはずなのに。目の前のことにはむしやりに向かうこの老人に、親近感を感じた。部活をやっていた時の僕もそうだった。「試合に勝つ」という目標は常に心の中にあつたが、いざ練習が始まると、試合のために動いているのではなく、ただひたすらにボールを追いかけ、ボールを打って……その感覚がたまらなく好きだった。老人が大魚と向き合った時も、同じような状態だったのではないだろうか。そしてま

た「なんて残酷なのだろう」とも思った。人生にはどんなに頑張っても報われないことはあるのだということをも老人の姿から改めて感じた。もしかしたら、世の中にはそういうことの方が多いのかもしれない。

しかし、残酷な経験をしたはずの老人の姿から、悔しさを読み取ることができなかった。死闘を繰り返した大魚をいつの間にか「兄弟」と呼び、駆け引きを楽しんでいる。サメの襲来に至っては、獲物を守るという意識よりも、仲間を守るような意識が強いのではないかと感じるほどである。残念な結果となって帰港した老人からは、後悔や悔恨が一切感じられないのだ。ここが僕と老人との違いである。最近の僕は後悔の塊だった。「あの時もつとこうしていれば」「本当は勝てたかもしれないに」などとついつい考えてばかりいた。でも、老人は全てが終わったあと、「もはや何の思いもなく、いかなる感情も湧かない。もうすべてが過ぎ去ったのだ。」と語っている。

この違いは何から来るのか？なぜ後悔しないのだろうか？たぶんそれは、老人が良い意味で燃え尽きたからだと思う。大魚と全力で向き合い、その時でできる最善を尽くして、生きて帰港できたからなのだ。「漁師」としては良くないのかも

しれない。でも「大魚の相手」として、「人間」として、最大限の力で目の前の出来事と向き合ったからこそ、燃え尽きることができたのではないだろうか。そして、それが僕にはまだ足りなかったのかもしれない。あの頃の僕には、無意識のうちに迷いや甘えがあつたのかもしれない。老人の達観した姿勢と比べたら、悶々としている僕なんてまだまだだ。

そしてもう一つ、忘れてはならないのは、「少年」の存在だ。かつては老人と一緒に漁に出ていた少年。どんなに不漁でも老人を信じ、気に掛けてくれる少年の存在があるからこそ、老人は生きることが出来ることも諦めないのだろう。僕だつてそうだ。一緒に練習してきたチームメイトがいたから、どんなに辛い練習でも、折れずに頑張ることができた。「わかつてくれる誰か」がいてくれることは、大きな力になるものだ。

「老人」は部活動を引退し、メンタルが弱っていた僕に大切なことを気づかせてくれた。物事は結果ではない。過程が大事。でも、その過程で最大限の力を出すことがこれからの僕の課題。「老人」もたたくさんの経験を積んできたのだ。僕も何度でも挑戦してみよう。今の僕には、やるべきこともやりたいこともたくさんあるのだから。

失うこと

弘前大学教育学部附属中学校

佐藤 聡一郎

この作品は、主人公チャーリーの日々が日記風に綴られて
いる。一人称視点で進むこの日記は、チャーリーの成長と苦
悩が非常に伝わりやすい構成となっている。特に印象的な
が、チャーリーが書く文字と言葉遣いだ。

手術前の文章は、三十二歳の大人の男性が書いたとは思え
ないような、子供っぽく、拙い文章だったのに対し、手術後
の文章は、日々努力を重ね、メキメキと知能をつけるチャー
リーの努力がよく表れている知的なものだった。

ただ、「知る」ことが、必ずしもプラスの結果に自分を導
いてくれるわけではなかった。

知能を獲得し、天才となったチャーリーは、自分が親に疎
まれていたこと、仲が良いと思っていた仕事仲間馬鹿にさ
れ、いじめられていたことを理解してしまった。一概に言え
るものではないが、もしも自分に起きたことだとしたら、そ
の悲しみは計り知れない。

世の中には、「知らぬが仏」という言葉があるが、この言

葉はまさにチャーリーの人生を表しているように思う。特に
「仲良くなりたい」と努力を惜しまなかったチャーリーがこ
のような仕打ちを受けるのだから、本当に皮肉なものだ。こ
れほどまでではないが、私も似たような経験をしたことがあ
る。

小学生の頃、ひとりだった私にとっても優しく声をかけてくれ
た女の子がいた。彼女は誰にでも優しく、男女問わず人気が
あった。頭脳明晰、品行方正、まさに非の打ちどころのない
人だった。少なくとも当時の私は、わずかながら彼女に好意
を抱いていた。そんな日々も、長くは続かなかった。「あの
ぼっち、私が話してやってるからって調子に乗って、本当に
気持ち悪い。」忘れもしないあの交差点。それは明らかに彼
女から発せられたもので、崩れ落ちることも、頬に雫を落と
すこともなく、立ち尽くしていたのを覚えている。

自分の存在する意味も、彼女への気持ちも、なにもかも崩
れて、自暴自棄になった。こんなことなら、始めから知らな

ければよかったと、私を騙だましていた彼女を、それに気づけなかつた自分を呪のろつた。

チャーリーに至つてはこれが家族にも及ぶのだから、本当に辛かつただろうなと思う。この作品で、チャーリーは知能を得る代償に、本来知らなかつたことを知つてしまった。

孤独を満たすものを得た私もまた、それを打ち消すほどの非情な現実を知つた。

これらことから、人は生きる限り死ぬまで失い続けるのだと、私は思つた。

こうやって筆を走らせている今も、刻一刻と時間は失われていく。シャーペンの芯だつて、消しゴムだつて、摩耗の末に失われる。人は死ぬ。地球だつていつかは消える。

これは紛れもない事実である。だからこそ、失うことを恐れてはいけないのだ。

全ての行動にはリスクが伴う。その度リスクを恐れていては、現状を打破することも、維持することすらできない。大切なのは、失う前に何をするかだ。

私たちはいずれ皆死んでいくのだから、生きていこうはせめて楽しもう。こうやって考えれば、上手いかなかつたとしても自暴自棄になることはなくなる。

それでも解決できず、自暴自棄になつて絶望に打ちひしがれたとしても、悲しみすらいつかは摩耗するのだ。初めはとげとげしくても、それは削れて丸くなる。形は残るが、そこに痛みは伴わない。それはいずれ塵ちりとなり、山となる。悲しみの分、人はより大きい山を自分のなかに形作つていく。

人は生まれながらにして可能性という重荷を背負っている。生きる上で人は悲しみ、苦悩し、失う。そうして削られた可能性は踏み台となつて、困難な試練を乗り越えるための道具となりうる。

こうして人は生きていく。人は花びらのように繊細で、蕾つぼみから咲いたと思えばすぐに散る。ただ、無数の花びらが織りなす景色は、いびつながらも優やさげで、美しい。その一部分にでもなれたら、それはきつと幸せだろう。

きよしこの夜

弘前大学教育学部附属中学校

鳥 潟 歩 美

私がこの本を読んだきつかけは、母が図書館から借りてきた本の中で、一番初めに手にとったものだったからだ。シンプルな表紙と聞いたことのある題名に興味を引かれ読み始めた。読んでいくと次の展開が気になり、まるで自分の意見をはつきり言えない私を見ているようで、面白くてどんどん読み進められた。

この作品は、吃音で力行とサ行が特に苦手な少年の成長を、七つの短編で描いたものだ。「きよしこ」、これは歌の一部。少年の名前は「きよし」。「きよしこの夜」を聞いた少年が「きよしこの、夜」だと勘違いをしたことから始まった。

きよしこは妄想の世界ではないが、少年からすれば唯一の友達で、どもることなく、話したいことを話せる友達だ。

少年は父親の影響でよく転校をしていた。その度に自己紹介をするのが少年にとって苦痛だった。きよしの「き」が詰まってしまうと、低学年の頃はよくからかわれ、引つ込み思案になっていた。そんな少年も学年が上がるとともに、不良

や野球上手な転校生、神社のおじさんなど色々な人と関わっていく。思春期で濁音などの言葉も苦手になっていくが、それに勝るたくさんの経験をしていくことで、どんどん大人になっていく少年。少しずつうまく喋れるようになり、言葉が詰まっても笑ってごまかす図々しさも身につけた。でも「きよしこ」のことは忘れない。一人で悩み苦しんでいた少年のような人に手を差し伸べてくれる、自信を与え、多くの人を勇気づけてくれる、そんな作品だ。

「北風びゅう太」は、七つの短編の中で私が一番心を動かされた物語だ。少年が小学六年生の時のお話。これを読んで誰かを突き動かす原動力とはこのことだと初めて実感した。まさか本で知るなんて。読み進めるうちに、次にどうなるのか早く知りたいという気持ちがずっとあった。最初はバットエンドで終わるのかと思ひ、少しハラハラしながら読んでいたが、結末を知った時は自然とホッと、笑顔が溢れた。物語にとっても感動し、それとともに少年が少し心を開いている

ようでなんだか嬉しかった。自分の言動、行動が誰かを勇気づけ、救うかもしれない。自分では気づいていなくても、私も誰かのそんな存在になっていれればいいと思う。

私は少年の本当の気持ちにはわからない。でも、言いたいことを自信を持って伝えられない悔しさや寂しさは共感できる。言いたいことを言えないもどかしさ、思い通りにいかなかった時、自分の考えを理解してもらえなかった時の孤独もよくわかる。吃音の人のことがわからなくても、言葉を伝えられる嬉しさや大切さなど、言葉を発せられることが当たり前でないことに気づけた。当たり前前に使っている言葉は、濁音や力行、サ行がたくさん出てくる。私は言葉を簡単に発している。話すことに自信がもてない、そんなことを思っている私は、少し欲張りなのかもしれない。言葉を簡単に発している一人でも多くの人にこの本を読んでもらいたい。私にとって、この作品が可能性や自信を見出してくれるきっかけにな

った。今まで抱えていた重荷がすっと取れて、心が軽くなった。本はこんなにも影響を与えてくれる力があつたんだ。一つ一つの言葉、少年の思いが読みながら心に刺さる。納得する、説得力のある言葉ばかり。この作品で少年について、言葉について改めて考え直したし、本の影響力にも気づくことができた。

読みながら何度も頭をよぎった言葉がある。「私も誰かの支えになる、影響力のある人になりたい」。今、吃音を知った。次は周りの人、いや世界中の人にこのことを知ってもらいたい。一人でも吃音について興味を持ってくれれば、少年のような思いを味わわなくてもすむ人が増えると思う。この感想文を通してでも良い。一人でも多くの人に私の思いが、少年の思いが伝わってほしい。そう思った。少年、私は君の話聞いたことで自信がついた。次は私が君のようになりたい。君は本を通して私にきっかけを与えてくれた。

カラフルな世界

弘前市立第一中学校

齋藤 久歌

対象作品／森絵都著『カラフル』理論社

コロナ禍に入ってから、自殺に関するニュースをよく目にするようになった。実際、調べてみるとコロナ禍に入ってから自殺者数は増えているそうだ。調べた記事の中には、わたしと同じ十代や二十代の若い世代で自殺をする人が増えていくという記事もあった。もしかしたら、わたしの身近な人達の中にもそうなるってしまう人がいるかもしれないと不安になった。そんなときに読んだのがこの本である。主人公は、生前の罪により輪廻のサイクルから外されたある魂で、自分の罪を思い出し、再び輪廻のサイクルへ戻るために、自殺を図った少年、小林真の体を借りて現世で修行を積むという内容である。不倫した母親、上司が検挙されても自分が昇進したことを喜ぶ父親、嫌味ばかり言う兄、中年の男性とラブホテルに入っていく初恋の相手、めんどくさいくらいにつきまといってくる同級生など、たくさんの人がこの話には登場する。だけれども、これは始めに主人公が決めていたそれぞれそれぞれのイメージであって、話が進むにつれて、その行動の理由や

その行動をするまでのそれぞれの心の変化が見えてくる。そうやって知っていくうちに、主人公のそれぞれに対するイメージが変わっていき、見える景色も広がっていく。

わたしたちは一人一人色とりどりの個性をもっている。それを認め合い、受け入れていくことが大切なことだとわたしは思う。当然人には合う、合わないがあるので無理をして受け入れるべきとは言えない。が、世の中には自分と少し違うからといって人の個性を頭から否定し、その色を消してしまおうとする人がいる。こんなに広い世界で、たくさん色が溢れているのだから、自分と同じような色を探すほうが困難である。その色を受け入れられないのは仕方ないとして、頭から否定するのではなく、一度その色を美術館で絵をみているときのようにじっくりと観察してみると、自分が気がつかなかった新しい色が発見されるかもしれない。たとえばその色が自分とは合わない色であつても、その色がその人の中でどのように作られていったのか、その色がその人にとってどの

ような役割を果たしているのか、じっくりとみて考えていくうちに、その人を見る目は変わっていくだろう。

わたしの中にはきつと、まだわたし自身も知らない色がたくさんある。わたしだけではなく、たくさんの人がそうだろう。ならば、お互い知らなかった色を教え合うこともいいのではないか、とわたしは思う。そしたら、自分を知ってもっと生きやすくなるかもしれない。

さんざん観察することや見るのが大事だと語ったが、それと同時に覚悟をもつことも大事だと思う。色を見る覚悟である。個性や感性という色は、人にはなくてはならないものだ。わたしは思う。だからこそ繊で大切にしなければならぬ。いくら分析のためだといっても、ズカズカと軽い気持ちで入っていくものではないと思う。今まで知らなかったことを知ろうとする分、知りたくなかった色の存在まで知るかも

しれないのだ。だから、知ろうとするなら知ろうとするなりの覚悟をもって色をみるのが大事だと感じたのだ。

世界にはたくさんの方がいる。その人の数だけ色が溢れている。世界はともカラフルである。そのカラフルな世界をわたしは少しずつでも知っていききたい。この本の主人公のように。少しずつ、少しずつ苦労したとしても。そして、みんなとお互いの色の良いところも、悪いところも受け入れて認め合っていきたい。そしたらきつと、もつともつと世界は鮮やかでカラフルになっていくのではないだろうか。たくさんでなくても、お互い色を認め合える人が一人でもいれば、生きやすくなる人が少しでも増えるのではないだろうか。お互いを認め、支え合うことがあたり前になればいいなど、この本を読んで強く感じた。

溺れゆく前に

弘前市立第二中学校

奈良岡 真里奈

対象作品／汐見夏衛著『さよなら嘘つき人魚姫』一迅社

この本を知ったのは、約一年前でした。

学校には、廊下に本の紹介をしたポスターがいくつか掲示されていて、偶然にもこの本を紹介するポスターに目が留まり、本文から抜粋された「一人魚姫は、もう、おしまい」という言葉に興味を持ちました。

偶然出会ったこの本は、私の考えを変えていき、読み進めていくほどこの本の題名はストーリーにびつたりだと感じました。この本、『さよなら嘘つき人魚姫』は、私のとても大切で大好きな本になりました。

この『さよなら嘘つき人魚姫』は、「嘘つきかまってちゃん」の綾瀬水月と、誰ともつるまず誰とも話さない「変人」の羽澄想の二人の視点でストーリーが進んでいきます。

二人には、他の人に知られたくない悩みがありました。もちろん、誰にも相談せず隠し続けている二人は、悩みを隠すための性格、「嘘つきかまってちゃん」や「変人」を演じ続けてしまったがために、どこにも居場所がなくなってしまう

ます。学校の悩みなら家で休んだり、転校したり、とできますが、二人の悩みは家の、しかも唯一の同居人の母親のことでした。

そんな二人が同じ時を過ごせば過ごすほど、二人の母親の束縛は厳しさを増していきました。限界まで追いつめられ、逃げようとしても失敗に終わり、すべての光を見失った二人は、観光スポーツであり自殺スポーツでもある「涙岬」で自殺を試みます。けれども、互いの「生きてほしい」という思いが伝わり、二人は生きる理由を見つけ、危機一髪のところまで助かりました。その大きな出来事もあり、二人は束縛されない自分のための人生を歩むことに成功し、嘘つきのこれまでの自分がそれを告げることができました。この本は、孤独な二人がそれぞれの悩みに立ち向かうまでの苦しく、そして切ない恋の物語です。

私はこの『さよなら嘘つき人魚姫』の本文最後の行を読んだ直後、自分自身も他の人に知られたくない悩みがあること、

そして今の社会では周りの人に馴染むためには、自分の考えや悩みを隠さざるを得ないということに気付かされました。

特に後者は、綾瀬のような相手に不快に思われたくない自分を守るための嘘や、羽澄のような兄を亡くした悲しみを思い出させたくない母親を守るための嘘など、人によつて違う複雑な悩みと嘘があり、簡単に「助けたい」と決意するだけでは誰も助けられないどころか、悩みを抱えていることにすら気付けないことがわかります。では、どうすれば綾瀬と羽澄の二人の悩みを自殺未遂が起こる前に解決できたのでしょうか？

本文では、綾瀬は羽澄に、羽澄は綾瀬に、足首と重石をくりつけたロープを切りはなし、「生きてほしい」という思いを互いに伝えることで「生きていたい」と思えるようになっていきましたが、その出来事が起こるまで先生や互いにもそれぞれの悩みを打ち明けていませんでした。羽澄の視点の文章でも、「大人に頼るって発想がまるでなかつたです。」や、「今思えば、飛び込んだりしてしまっ前に、初めから彼女とたくさん話しておけばよかったのだ。」というように、相談という手段が頭になく、一人で悩みを解決しようとしていたことが読み取れます。しかも「主力で気づかれないようにしていた」ともあり、助ける側は一切、悩みについて触れない状況でした。こればかりは本人が意思表示をしなけれ

ば何も始まらないと思います。二人は悩みに無理矢理蓋をしていました。私はずっとどうすればよいか考えていましたが、やはり苦しいことは信頼できる人に本人が相談するしかないという結論に至りました。私は、まだこの世界では気軽に悩みを打ち明けられないこと、そして私自身もそんな世界を変えようと動けておらず、未だ誰が何の悩みを抱えているのかわからない現実、かなりショックを受けました。

この世界は生きづらいです。それは私でも、誰でも少しは感じていると思います。その生きづらさは人によつて違います。あたり前のことですが、生きづらさは人によつて違います。重い人は可哀想、軽い人は大したことない、ということとは絶対ありません。

例えば、海まで続く何本かの道のうち一本に、誰かが砂浜の近くに、私がそこから少し離れたところにいるとします。道はたくさんあるのに、その人の悩みで霞がかかり、一本しか見えていません。でも私は、その人をこちらに呼ぶことができます。船を用意できます。かけ寄って、砂浜で一緒にいることができます。霞を晴らす以外にも、方法はいくらでもあります。その人が、大切な人が海で溺れてしまっ前に、手を差し伸べる。それだけで生きる理由になる、と私は信じています。

法律 とは何か

弘前市立南中学校

相馬 一護

対象作品／松村涼哉著『15歳のテロリスト』KADOKAWA

「王て、吹き飛んでしまえ」

少年は吐き捨てるように言った。突然の犯行予告。誰もかデマだと思っていたが、その後、本当に起きてしまった新宿駅爆破事件。容疑者は渡辺篤人。たった十五歳の少年の犯行は、世間を震撼させた。

近年注目されている「少年法」や「少年犯罪」は、十五歳の僕たちも考えるべき問題であると思う。

僕はこの本と、「法律」という言葉を通して出会った。僕の将来の夢は弁護士になることだ。だから、夢に近づくために法律の本を読もうと思ったことが出会いのきっかけだ。数多くある法律の本からこの本を選んだのは、「少年法」という言葉に惹かれたからだ。十五歳の僕にも適用されることから、僕にとって最も身近な法律だといえる。

この本の筆者は、「少年犯罪」や「復讐の連鎖」といった、扱いにくい問題についてもしっかりと描いている。特に加害者遺族の被害者性、世論の加害者性。また、被害者遺族の加

害者性について、すごく丁寧に描かれていると感じた。少年犯罪を犯した少年たちの家族の末路が生々しく、痛々しい。だが、そんなところも「少年犯罪」や「少年法」を考える僕にとつて大切な表現なんだと思えた。

ある日、記者の安藤は恋人の命を奪った少年、灰谷ユズルが社会復帰しているのを目撃し、怒りのあまり少年のその後を記事にした。このような行為は現実世界でも起こっていると思う。なぜなら、僕を含め世論は、加害者のその後や事件の詳細を知りたがっているからだ。その背景には「少年法」が関係している。どんなに凶悪な事件を起こしても、「少年法」に守られている少年たちは、ニュースや新聞で「少年A」と報道されるからだ。そして、その事実がさらに世論を突き動かす。

僕にはこの本で好きな場面がある。それは、渡辺篤人がもたらした影響で、少年法改正のデモが起こった場面だ。このことを踏まえてもう一度タイトルを見てみると、僕は鳥

肌が止まらなかつた。タイトルの『15歳のテロリスト』は、「テロを犯し、犯罪者となった少年」という意味合いの反面、「社会に影響をもたらすし、法律にテロを起こした少年」という意味合いにも僕は取れると思った。

僕は初めて、メディアワークスさんと松村涼哉さんの作品を読んだが、筆者の松村さんはすごく冷静な方だと文章の隅々から感じた。だが、決して冷酷ではなく、ところどころに温かく、寄りそってくれるような表現もあった。僕はまた、メディアワークスさんや松村さんの本を読みたいと思った。

僕は『15歳のテロリスト』を読み終えたあと、この本のテーマは、「少年法」「少年犯罪」の他に、「メディア」の三つであると感じた。メディアの一つの報道が事件の解決に役立つ反面、灰谷ユズルのように事件を悪化させるきっかけにもなる。このことから、メディアの加害者は、犯罪と切っても切れないような関係だと思ふ。そして、その関係が物語の鍵となっている。

この物語には終始「スノードロップ」という花が登場している。僕は気になり、その花について調べた。それでも僕は鳥肌が止まらなかつた。なぜなら、スノードロップの花言葉が「希望」と「切ない恋愛」だったからだ。「希望」は渡辺篤人の今後を、そして、「切ない恋愛」は灰谷アズサの恋心

を表していて、両者の思いを一つの花で表現している。そして最後のワンシーンでは、二人の座っているベンチの前にスノードロップが咲き誇っていて、スノードロップは二人の関係を象徴する花であると感じた。

最後に、犯罪や事件には多くの人が関わっていると僕は思っている。被害者や加害者、遺族、世論、マスコミ、メディアなどたくさんの方の声や意見がある。それぞれみんな意見も違えば目線も違う。渡辺篤人が何度も主張していたように、目線や意見に寄るのではなく、真実を知ることだ。

「犯罪を犯した人は裁きを受け、罪を償わなければいけない。」

この声は正しい。

「少年法は甘い。もっと厳しくするべきだ。」

この声もきつと正しい。だがその前に、どうして犯罪が起きたのか、「誰が本当の悪人か」を知らなければいけない。それを知らなければ加害者を罰することもできない。そして、被害者や遺族も納得しない。被害者に報いることもできない。既存の「少年法」や「少年犯罪」に対しての感じ方や見方、考え方がガラリと変わる作品だと僕は思った。

これからは、何事にも深くさぐって真相や真実を知り、正しい行動や発言をしようと思つた。

わたしはイエロー

弘前市立第四中学校

石戸 たまき

子供の成長に大人は大きく影響を与える。だからこそ私は保育士になり、子供の成長においていい影響を与えられる人になりたい。

この本には、日本と英国の異なる文化、風習、考え方がたくさん出てくる。その中でも私が興味深いと思ったのは、幼児教育に関するものだ。

英国では、言葉を使った自己表現力、創造性、コミュニケーション能力を高めるために、演劇が重視されているということに関心を持った。英国の幼児教育施設は、演劇的な指導を日々の教育に取り入れているらしい。表情や言葉を通して感情を表現することを教え、自分の感情を正しく他者に伝えられるように訓練している。感情表現の仕方を知ることが、他者の気持ちを読み取ることにもつながるだろう。私はこの教育方法に感銘を受けた。日本でも人の感情が理解できない子供はたくさんいると思う。そのため他者を傷つけてしまったり、トラブルになってしまったりすることがある。感情を

表現する方法は学校で教わるものではないが、人間関係において必要なことであるため、日本にも取り入れるべきだと思った。

「シティズンシップ教育」というものも登場する。これは、他者を尊重しながら市民として社会に参加し、その役割を果たせるように教育することだ。日本という、社会の「公民」などにあたるだろう。社会に主体的に関わっていく姿勢を学ぶことで、将来の世界の在り方が変わってくるのだと思う。

「決めつけないでいろんな見方をするのが大切」という言葉が出てくる。私はこれにとっても共感した。人は他者を見るとときに見た目だけで判断し、偏見を持った態度で接してしまふことがある。このような態度は相手にも意外と伝わっているものだ。いい関係を築いていくためには、先入観や偏見を取り払い、その人自身を見ようとするのが大切だと思う。「ぼく」の友達に対する態度はとても大人だ。人種差別丸

出しの移民の子とも、趣味が合うという理由から仲良くなり、差別的な発言をたしなめながらうまくつきあっている。この子も少なからず親の影響を受けているのだと思う。それを客観的に見てつきあっているのだから尊敬に値する。また、同じ東洋人であることから「ぼく」を気にかけてくれる中国人の生徒会長も登場する。彼は、「ぼく」の前で東洋人を差別するような発言をした上級生に暴力の脅しをしよう。しかし、「ぼく」はその仲間意識はわからない、と母ちゃんに相談している。「ぼく」の割り切った性格は簡単にまねできるものではないと思う。私は周りに流されて悪口を言ってしまう。やるべきことがあるとわかっているのに遊んでしまった。友達がやっていたからつい自分もやってしまった、そんなことはよくある。しかし、「ぼく」はその子を認めながらも譲れないところは譲らない、正しくないところは注意するという強さを持っている。周りに流されず、自分が仲良くなりたい人と友達になるところや、曲が

ったことは許さないところを見習いたいと思った。

「母ちゃん」は私の母によく似ている。私も悩んだ時や不満がある時、よく母に相談する。そんな時、母は私の考えを肯定した上で、客観的な視点からアドバイスをくれるのだ。言語化すると感情が整頓されていく気がする。「ぼく」がブルーな気持ちから始まった中学校生活を楽しめているのは、事あるごとに話を聞いてくれる母ちゃんがいたからこそだと思う。私が今の感情を表すとしたら、「イエロー」かもしれない。イエローには幸せという意味がある。私は喜怒哀楽さまざまな感情を抱きながら少しずつ成長している。その成長には母との会話が必要不可欠だ。経験し、相談し、消化し、成長する。そんな環境にいられることが幸せだ。

この本を読んでたくさんのお話を教わった。この世界はまだまだ私の知らないことであふれている。「子供にいい影響を与える大人」になるために、「ぼく」と一緒に成長していきたい。

自分の考えを伝えようとする大切さ

弘前大学教育学部附属中学校

山口 青空

吃音^{きつ}とは何か。それは話すときに最初の一言が詰まってしまうなど、言葉が滑らかに出てこない発音障害だ。自分の言いたいこともうまく言えず、授業の発表、お店での注文、友達との会話でさえも満足にできない。今の私にとつては考えられないことだ。思ったことを口にできないことはとてもつらいし悔しい。また、人とコミュニケーションをとることも難しくなると思うときびしい気持ちになる。この本の著者も吃音だ。その少年時代をモデルとして書いたのがこの本だ。うまく話せないなか、少年はどのようにして自分の考えを人に伝えたのだろうか。

少年はクリスマススイブに両親から包みもらった。中身はいちばん欲しかったものではなかったが、私は喜ぶと思っていた。しかし、少年はその包みをタンスの角に叩^{たた}きつけた。まさか、少年がもらったものを壊すとは思ってもみなかった。いちばんではなくても、少年にとつて欲しいものだったはずなのになぜだろうか。しかし、少年の感情が少しだけわかっ

た。普通の子だったらいちばん欲しいものを素直に伝えられるが、吃音のため伝えたくても伝えることができない。それに、少年にもプライドがあり、黙って指を指して伝えたくなかった。結果として、いちばん欲しかったものも手に入れられず、吃音でプライドが高い自分自身が悔しくて、いらだつてそのようなことをしたのだろう。私も人にものをうまく伝えられないときに、少し情けないと思うことがある。少年と私は少し似ているところがある気がした。

その夜、少年は「きよしこ」に会う。その二人の会話の途中にきよしこはこんなことを言った。

「それが、君のほんとうに伝えたいことだったら……伝わるよ、きつと」

この言葉が私の心に響いた。抱きついたり手をつないだりしていれば伝えることができる。私も抱きつかれたことはないが、うまく説明されなくてもなんとなく伝わるがあった。好きなものの話を私にしてくれる友達がいる。その人は懸

命にそのものの魅力を伝えようとしてくれる。言っていることに違和感があるときでも、何を伝えたいかはほんやりわかる。それはその人の必死さや熱意、足りない言葉を感情が補い、他の人の心へ伝えるからだ。心と心がつながるとわかりあえる。少し嬉しいと感じた。

翌朝、少年はきよしこにいわれたとおりに母親と父親に抱きついた。少年の気持ちは安らぎ、想いを伝えることができた。いわれたことをしただけだが、それもすごいと思った。うまくいかないかもしれないのに、すぐに実行する少年を私は見習いたい。

私たち日本人は周りに流されやすい人が多いと思う。少なくとも私はその典型だ。それは、自分の考えが人にうまく伝

わらないのではないかと考えたり、そもそもやってみようと
思わないからだ。だから自分の考えもいわずに、人について
いくだけになってしまふ。確かに楽だが、考えたことを伝え
られないことが続いていくと悔しい気持ちでいっぱいになり、
少年のように限界がくるかもしれない。だからこそ、きよし
こが教えてくれたように、自分の意見を伝えようとするべき
だ。うまく話せなくても、伝えようとするだけで人に伝わる
かもしれない。そして、少年のように思い切つてやってみれ
ば、案外いい結果が得られるかもしれない。吃音の人でも人
に考えを伝えられるのなら、私たちはもっと簡単に人に伝え
られるはずだ。どんなときでも人に自分の考えを伝えようと
する姿勢を大切に、対話を楽しめるようにしたい。

応募作品審査講評

小学校三年の部

佐藤 信孝

小学校三年の部には、八校より三〇編の作品が寄せられました。どの作品も本をしつかりと読み、初めての読書感想文を一生懸命書いたことがよくわかり、うれしくなりました。

学習指導要領では、「書く内容の中心を明確にすること」、「自分の考えとそれを支える理由や事例との関係を明確にすること」などが指導内容となっています。ですから、読書感想文を書く際にも、読書後にあふれてくる思いを順序よく一気に書くのではなく、「一番強く感じたことは何か」を整理することが大切です。

第一席は、小沢遥輝さん（福村小）の「人はそれぞれ違うんだ」です。本田久作『おれは女の子だ』を読んで、人によって好きなものや考えは違つてよいとまとめています。三年生の男の子の感性を揺さぶる内容で、主人公の「おれ」に共感しながら、本の中で追体験することを通して、相手の気持ち想像し、思いやりのある行動をする大切さに気づいていきました。本の内容と自分の考えのバランスがよく、感想文を楽しく読むことができました。

第二席は、後藤碧斗さん（和徳小）の「十分のしゅくだいと二時間のウソ」です。山本悦子『先生、しゅくだいわず

れました』を読んで、ウソの理由を考えるよりも宿題をやった方が早く終わるという事実を客観的にとらえ、ぼくは宿題を忘れませんと決意を新たにしていました。後藤さんのように、一番心に残った言葉を題名にするのも、書く内容を明確にする方法の一つです。

第三席は、山本千瑞さん（東小）の「すてきなひとりぼっち」です。なかがわちひろ作『すてきなひとりぼっち』を読んで、主人公の男の子と自分を重ねて読み、わたしはひとりぼっちじゃないと気付くことができました。一番好きな場面が「朝でも夜でもないような月と太陽が出ている空」なのだそうです。この情景描写から、「男の子はもう一人じゃない。」と感じる感性は素晴らしいと思います。

今回選んだ作品は、「おもしろかった」「楽しかった」という短い感想を羅列した作品ではなく、自分の思いや考えを述べている作品を選びました。三年生は、登場人物に共感したり、反論したりする自分との対話を通して、自分の心の中を整理したり感情をコントロールしたりする力がある身につけてくると思います。また、選外になった作品の中には、読んだあとの思いを一気に書き綴った作品がたくさんありました。本を夢中になって読み、書きたいことがいっぱいあったのでしょうか。それを整理するのが読書感想文です。一番強く感じたことは何かと考え、自分の心と対話することを大切にしてほしいと思います。

小学校四年の部

築館潤子

小学校四年の部には、二十二編の応募がありました。感想文の対象となった図書の表紙を並べると、子供のイラストだけでなく、犬や猫、馬や恐竜などの生き物が目に飛び込んできました。応募者の皆さんが本を手取る姿を想像し、うれしくなりました。

それでは、作品の講評です。第一席は、石岡実結さんの「不公平は公平だ」です。実結さんは、コンプレックスをもつ登場人物の言動に自分自身を重ねながら読み進めました。自分が「とてもさんねんでかわいそうな子なのかと心の中がモヤモヤ」したり、小さい頃は感じなかったのに「言われると心の中がチクチク」する自分と向き合いました。しかし、「不公平は不幸ではない」と気付き、心が軽くなった喜びを感じることができました。

第二席は、三政好美さんの「コケシちゃんを読んで」です。好美さんは、タイプが異なる二人の言動や背景に心を動かされながら読み進めました。友達を助けたいという思いから「自分に自信がなく、おどおどしている」登場人物が大きい声を出した場面に驚き、その後「おこられるのかほめられるのか、とてもはらはら」しました。しかし、「ゆうきを出したことが仲良くなることにつながった」ことに嬉しさを感じることもできました。

第三席は、中井太陽さんの「縄文時代の子どもたち」で

す。太陽さんは、自分が好きな歴史の本から、少年鑑定団が縄文土器に関わる一冊を選びました。縄文時代の子どもたちが「ぼくたちと同じように走り回って遊んだり、宝物を大事にとっておいたりした」ことを想像し、うれしさを感じました。また、「ちよつとはずかしい」経験を思い起こし、「自分が本当に良いと思ったものを自分の目と心で見つける」ようになりたいと、思いを新たにすることができました。

佳作の三編も素晴らしい作品でした。鳥飼千歳さんは、チヨウはなぜ飛ぶか知りたいという問いを持ち続けて読み進み、日高敏隆さんの一つ一つの研究の様子からチヨウへの理解を深めました。相馬万生さんは、ドラえもんに登場するのび太の優しさに感心し、偏見を持たずに人と接してみようと決意しました。泉愛菜さんは、難病の吉村和馬君が家族と一緒に旅する様子を読みながら、不安で一杯だった自分自身の経験を思い起こしました。

さて、小学校四年生は、友達との関わりの中で心がぐんと成長する時期です。本の世界に没頭し登場人物になりきる経験を通し、うまく言葉にできなかった自分の気持ちを表す一言を見つけられるかもしれません。

何年か後、この「文集はと笛」に掲載された自分の感想文を読み返した時、当時の着眼点や発想に驚き、がんばれ！と自分を応援することでしょう。もしかしら、感動する部分があずれていてもどかしさを感じたり、もうちょっと説明して欲しかったと物足りなさを感じたりするかもしれません。いづれにせよ、この読書感想文が、数年後の自分に四年生の自分の気持ちを伝える手段になっているはずですよ。

小学校五年の部

地主 尚子

今年市内八校から十六編の応募がありました。夏休みを使って、このコンクールに応募してくれた皆さんの頑張りに大変うれしさを感じました。どの作品も、読書で得た思いを丁寧にまとめていました。特に今年度は、物語の登場人物が感じたことや起こった出来事と自分の経験を結びつけ、そこから自分の考えを述べたり共通点を見つけたりしている作品が多かったです。また、文章からみなさんの人となりも浮かんできて、審査していて楽しかったです。これからもいろいろな本に触れ、感じたことや考えたことを、自分の生活に生かしてほしいです。

さて、みなさん。意見文と読書感想文の違い、どんなところだと思えますか。例えば、太宰治の『走れメロス』を読んだと読書感想文を書いたとしましょう。

「困難に立ち向かいながら、最後まで走り続けるメロスの行動に感動しました。あきらめないで頑張ることは大事だと思いました。」

この文章であれば、友情や人間の弱さをテーマとした本なら、どの本を読んでも書けそうですね。これは意見文です。「困難に立ち向かい、最後は親友との再会を果たすことができました。目標に対しての努力、そしてあきらめないとい

う強い心が、メロスにあったのだらうと思いました。自分だったら、もう止めようと思ったかもしれない。ぼくはメロスから、目標に向かって努力すること、人間の強さを教えてもらったような気がします。」

これなら、読書感想文となります。今回、意見文に近い作品が何点ありましたので、十分気を付けてください。

第一席は「人間は猛獣使い」。『山月記』は、小学五年生にとってはかなり難解な作品ですが、三浦さんは本の内容を読みこなしていたようですね。素晴らしいの一言です。三浦さんは、強く心が揺さぶられた一文から、李徴の生き方と自分の中にある「猛獣」を照らし合わせると共に、そこにどう向き合うかの視点で文章を展開していました。最後の前向きな考え方に、三浦さんの強い思いを感じた作品でした。

第二席は「みんなの楽しい学校をつくるために」。古川さんは、本をしっかり読み込み、主題を捉えた上で読書感想文を書いたのでしょう。そのため、本と生活が結び付いた読み応えのある作品となりました。また、五年生らしい表現で、読後の変容が伝わってくる書き方もよかったです。

第三席の「自由と責任」は、本の選書が良かったと思います。自分の経験から選書されていると、本と生活が結び付きやすく、主題に迫りやすいものです。「言葉の表現」について考えたことを軸に文章を展開したことで、どのような考えをもつようになったかがよくわかる作品でした。ただ、途中から、感想文というより意見文に近い感じになったかな。

小学校六年の部

三 浦 隆 史

今回の応募作品数は十九編、応募校は八校です。昨年度は三十編でしたので、大幅に減少しました。子ども達の読書離れが心配になりました。それはさておき、今回の読書感想文審査にあたっての私の指標は「自分自身の心が作品に出会うこと」によってプラスの方向に転換したこと」を自分らしい表現で書けているかです。そこに着目して審査した次第です。

第一席「幸せなたまご」

冒頭の「私は読書感想文を書くために弘前市立図書館へ本を探しに行きました。」「私もアニマルウエルフェアのことを調べました。」「調べたら平飼いたまごというのができまして。」「これらのことから、小林さんの図書館にいた時間の長さがうかがえます。単に本を読むだけではない、情報収集のための調べる読書も、いわゆる平行読書をしていたことが分かるからです。この意欲に敬意を表します。」「いつか空の下で」を読んで気になったことを深く調べるうちに、人と動物の共生といった重要な概念が形成されたようです。今後の活躍に期待したいです。

第二席『注文の多い料理店』が教えてくれたこと」

「罪のない生き物が深く考えない人間に殺されていく話を聞

き、かれらはどんな思いで罪のない生き物を次々と殺しているんだろう。」とても共感できます。生命を軽んじ、自分のことしか考えない一部の人間への警鐘ととらえられます。小笠原さんの「将来いろいろな人の命と向き合っていく、命の大切さを伝えたい。」から、将来の彼女の方向性が見える気がします。

第三席「命の大切さ」

「わずか十一才でなくなってしまうたゆきなちゃん。病気がつらくても明るく笑顔で生きてきたゆきなちゃんを見習って今の時間を大切にしていきたいな。」から、「いただいた大切な命を心に刻み、日々を充実させていこう。」といった三浦さんの前向きな意欲を感じた読書感想文でした。この本をたくさんの子供が読むことによって、昨今の自殺者、不登校の増加に歯止めがかかればいいなと思いました。

近年、夏休みの宿題から読書感想文が削除される傾向にあるようです。ある作家は、「子どもの夏休みの宿題に読書感想文を書かせるのはよい宿題ではない。実に苦痛で気の重いことであり、本を読むことまで苦痛に感じてしまう。」と、指摘しています。その書かせ方が問われているようであります。ともかくにも、読書は心の栄養となり、情報収集の手がかりであることは間違いありません。人生を豊かにするため、読書する子どもが増えることを願っています。

中学校一年の部

佐藤 史子

第一席「世界の分子としての僕」

悩めるコペル君に自分を重ね、そっくりな点に驚きつつもほっとしている自分にも気づいたと素直な心で感想を綴っています。作品を読み進めるなかで、人の「生き方」や「幸せ」についての考えを深めました。コペル君の「人間は世界の中の分子」であるという言葉から、吉田さんは「僕は小さな分子だけれど、分子の動きは他の分子に働きかけることができる。」と考え、「他の人のために行動する人間になりたい。」という一文で最後を結んでいます。この決意の言葉が『君たちはどう生きるか』に対する吉田さんの答えです。中学一年生の等身大の考えが述べられており清々しい感想文です。

第二席「ラッキーガール夢を跳ぶ」

「夢を跳ぶ」とはどういうことなのか、という問いの答えを考えながら小笠原さんは本を読み進めました。スポーツが生活の一部であった著者佐藤真海さんが、右足を切断しながらも前向きに生きていく姿に、自身の病気の経験も重ね、問いの答えにたどり着きました。「夢をゴールと捉えるのではなく、夢を叶えた次にも希望をもち明るく前向きに生きてい

こう。だから夢に着地するのではなく跳ぶのだ」と。小笠原さんの内なる強さに触れることができた感想文です。

第三席「仲間と走る」

物語自体が駅伝レースとなっている作品で、走者の思いがレースの進行とともに明かされていくストーリーです。八木橋さんは、走者一人一人に陸上部員である自分を重ねながら人物像を捉え綴っています。優れた表現力によって八木橋さんの心の揺れが伝わってきます。また短い文を重ねることで文章全体にテンポが生まれ、読み手を引き込みます。作品を通して「陸上はチームスポーツだ」と実感し、自分も未来のゴールに向かってひたむきに走ることを決意しています。疾走感あふれる感想文です。

「読書感想文を書く」ということは、読書によって内面に起こった変化を言葉に表していくことです。私たちは普段いろいろな経験をするなかで様々な感情を抱き、思いや考えを表現し、そして他者の考えにも触れ、ということを繰り返して自分の考えを構築していつています。ですが、それを言葉に表すという機会は多くはありません。自分の考えを形にしていく作業は大変ではありますが、自分を知る貴重な経験となります。そこに読書感想文を書くことの面白さがあるのではないのでしょうか。是非、読書感想文を書くことを通して自分の価値観の変化や、心の成長を実感する喜びを味わってみてはいかがでしょうか。

中学校二年の部

奈良 篤志

自分の中学・高校生時代を思い起こすと、読書感想文を書くのが本当に苦手でした。「その作品を選んだ理由」を書いて、「あらずじ」を紹介し、「印象に残った場面や台詞」に触れて、「自分が何を考えたのか」を書いて……、とは教わったのですが、なかなか上手くいきません。あらずじがだらだらと長くなったり、ありきたりな「感想」しか書けなかったりと、納得のいく感想文を書けた記憶がないのです。それに比べ、今回選ばれた読書感想文は本当によく書いています。内容に感心するとともに、その文才がうらやましくもありました。

まずは第一席の『か』『く』『し』『ご』『と』『』という作品を読んでの『「違い」への向き合い方』ですが、特別な能力を持つ登場人物五人が成長していくあらずじを説明しながら『「違い」について触れ、トランスジェンダーとして芸能活動をしながらも、自らの命を絶つてしまった芸能人にスポットを当てています。そこから、『普通』に縛られず一人一人が考え方を変えていくことが必要だ』という主張は見事な流れでした。そして、『「違い」を理由に傷つける』のではなく、「みんなの足りない部分を補い合うために『違い』がある」という結論も、とても考えさせられる内容となっております。

ました。

第二席の『心のバリアフリー』は、『生きる』という作品の感想文です。高校生のとき事故で手足の自由を奪われながらそこから立ち上がり、ウエブデザイナーに挑戦したり会社を設立したりと、様々な活躍をする作者への共感が盛り込まれています。自分の心が折れそうになったとき、寄り添い助言をしてくれた担任の先生のエピソードを紹介しながら、『今度は私が、誰かの『心のバリアフリー』になりたい』と結んでいます。読んでいて心が温かくなりました。それと同時に、ぜひこの作品を読んでみたいと思わせてくれる感想文でした。

第三席の『アルジャーノンに花束を』は、知的障害を抱える主人公が実験的手術で知能を高め、普通の生活を送るようになってからの苦悩を描いた物語です。感想文では「もしかしたらチャーリーは手術をしなければ良かったのかもしれないと何度も思いました。」と感想を述べながら、「知能について深く考えさせられた」ことに触れています。その中でも、「人間として本当に大切なものは知能などではなく他人を思いやる気持ちや愛情なのではないか」という意見にはとても説得力があり、そして作品のテーマについて考えさせられるものでした。

このほか佳作と努力賞に入った感想文も、自分の思いが上手く表現されていると同時に、作品そのもののへの興味をそえられる内容となりました。

中学校三年の部

鈴木敏浩

読書感想文の醍醐味は、自分の心との対話が形となつて読み取れることであり、義務教育の最終学年となる皆さんの作品は自分の思いが溢れ出ればかりの読み応えのある作品ばかりでした。今後も読書を通じて豊かな「心の対話力」をばぐくんでいただきたいと思います。

第一席は「老人と海」を対象とした、千葉晴登さんの作品です。主人公の老人と部活動を引退した失意の僕を重ね合わせながら、自分の今の気持ちを飾ることなく素直に、かつ力強く書き綴っています。自分と登場人物の共通点や相違点から、自分をもう一度見つめ直そうという晴登さんの姿勢が読み手に強く伝わる作品です。

第二席は「アルジャーノンに花束を」を対象とした佐藤聡一郎さんの作品です。自分の辛い経験を重ね合わせながら、自分なりの人生観を、文学的な表現を巧みに使い迷いなく展開している聡一郎さん。今後も自分の発想を広げてくれる良書に出会うことを期待しています。

第三席は「きよしこ」を対象とした鳥瀧歩美さんの作品で

す。物語の展開を丁寧に追いながら、主人公が直面するコミユニケーションの重要性について考えています。そのことを通じて自分の生き方に自信と勇気を与えてもらった過程が温かい言葉で綴られています。歩美さんの人柄が感じられる作品です。

三者三様の書き方ながら、どの作品も個性があり、作品を通じての思いがよく伝わってきました。

また、佳作に入選された作品にも、書き手の心の対話を読み取っていただけばと思います。

心の対話と言えば、以前、小説家の森絵都さんが読書について書いたエッセイに「もしあなたが本の中で、心から共鳴できる誰かと出会ったら、それは自分の外側ではなく、内側に友達を作ったということです。」と書いていました。その友達が「あなたと共に悩み、答えを求めてくれる強力な味方」になつてくれるとも述べていました。

今では携帯等で外側に繋がりを作ることは簡単にできますが、そういう今だからこそ、読書を通じて自分の心の内側に頼れる友達ができることを願いつつ、今後、それぞれの進路を歩む皆さんへのエールとします。

○努力賞一覧

☆小学校三年の部

弘前市立和徳小学校	穂元陽菜
弘前市立和徳小学校	清水晃希
弘前市立和徳小学校	鎌田要
弘前市立和徳小学校	佐藤利柘
弘前市立和徳小学校	清藤結太

☆小学校四年の部

弘前市立松原小学校	平野廉
弘前大学教育学部附属小学校	櫻庭綾乃
弘前大学教育学部附属小学校	境紗葵

☆小学校五年の部

弘前市立東小学校	山本楚々
弘前市立文京小学校	木村柚羽
弘前大学教育学部附属小学校	別宮志郎

☆小学校六年の部

弘前市立福村小学校	當麻陽士
弘前大学教育学部附属小学校	室谷悠惺

弘前大学教育学部附属小学校

福田晴日

☆中学校一年の部

弘前大学教育学部附属中学校	小林奏太
弘前大学教育学部附属中学校	山口緋月
弘前大学教育学部附属中学校	長久利生

☆中学校二年の部

弘前市立第五中学校	佐藤帆花
弘前大学教育学部附属中学校	室谷桜花
弘前大学教育学部附属中学校	越前柁音
弘前市立第五中学校	工藤可蓮
弘前市立第五中学校	葛西美咲季

☆中学校三年の部

弘前市立第三中学校	村上永佳
弘前市立第四中学校	成田智久
弘前市立第五中学校	奥井孔柚峨
弘前市立東中学校	佐々木音寧
弘前大学教育学部附属中学校	田中さくら

○感想文の対象となった図書

☆小学校三年

〔書名〕

〔著者名〕

〔発行所〕

すてきなひとりぼっち

なかがわちひろ

のら書店

秘密に満ちた魔石館

廣嶋玲子

PHP研究所

はっぴょう会への道

山本悦子

PHP研究所

おしりたんでいファイル2 やみよにきえるきよじん

トルロ

ポプラ社

ウナギのいる川いない川

内山りゆう

ポプラ社

先生、しゅくだいわすれました

山本悦子

童心社

10分で読める物語3年生

青木伸生

学研教育出版

火垂るの墓

野坂昭如

徳間書店

しっばいにかんぱい!

宮川ひろ

童心社

謎のメールレストラン(怪談レストラン)

松谷みよ子

童心社

宇宙の声

星新一

角川書店

フランダーズの犬

ヴィイダ

学研プラス

おぼけは本当にいるの?

岡嶋康治

PHP研究所

サイアク!

花田鳩子

PHP研究所

崖の上のポニョ

宮崎駿

小学館

千と千尋の神隠し

宮崎駿

徳間書店

ふしぎ駄菓子屋銭天堂

廣嶋玲子

偕成社

耳をすませば

柊あおい

徳間書店

おかしの国のお姫さま

綾真琴

学研プラス

トイストーリー3

ジャスミン・ジョーンズ

偕成社

5分後に君とまた会えるラスト

エプリスタノ編

河出書房新社

おれは女の子だ

本田久作

ポプラ社

かいけつゾロリのなぞのおたから大きくせん

原ゆたか

ポプラ社

鬼まつりの夜

富安陽子

講談社

きょうだいぎつねのコンとキン 村山桂子

フレーベル館

フードバンクどろぼうをつかまえろ!

オンジャリQ、ラウフ あすなる書房

給食室のいちにち

大塚菜生 少年写真新聞社

チョコレート工場の秘密

ロアルド・ダール 評論社

字はうつくしい わたしの好きな手書き文字

井原奈津子 福音館書店

☆小学校四年

〔書名〕

〔著者名〕

〔発行所〕

コケシちゃん

佐藤まどか フレーベル館

読んでおきたい名作小学4年

川島隆太/監修 成美堂出版

たから島

スチーブンソン 集英社

どうぶつと暮らすということ

福田裕子 KADOKAWA

消えた落とし物箱

西村友里

学研プラス

赤毛のアン

L. M. モンゴメリ

KADOKAWA

シャイローがきた夏

フィリス・レイノルズ・ネイラー あすなる書房

ぼくらは少年鑑定団！大発見！謎の縄文土器

くすのきしげのり 講談社

チヨウはなぜ飛ぶか

日高敏隆 岩波書店

ぼく、がんばったんだよ 筋ジストロフィーの少年の旅

沢田俊子 汐文社

あつちもこつちもこの世はもれなく

いとうみく PHP研究所

スーホの白い馬

大塚勇三 福音館書店

「のび太」という生きかた

横山泰行 アスコム

わたししんじてるの

宮西達也 ポプラ社

捨て犬・未来と子犬のマーチ

今西乃子 岩崎書店

きつねのスケート

ゆもとかずみ 徳間書店

あいしてくれてありがとう

宮西達也 ポプラ社

名犬チロリ

大木トオル 岩崎書店

犬と私の10の約束

サイトウアカリ アスキー・メディアワークス

はらぺこねこ

木村由利子 小学館

しつぱいにかんぱい！

宮川ひろ 童心社

感染症キヤラクター図鑑

岡田晴恵 日本図書センター

☆小学校五年

〔書名〕

〔著者名〕

〔発行所〕

5年2組横山雷太、児童会長に立候補します！

いとうみく そうえん社

中村哲物語

松島恵利子 汐文社

リターン！

山口理 文研出版

かいけつゾロリ

原ゆたか ポプラ社

セロ弾きのゴーシュ

宮沢賢治 KADOKAWA

山月記・李陵

中島敦 KADOKAWA

タロとジロ 南極で生きぬいた犬

東多江子 講談社

素数ゼミの謎

吉村仁 文藝春秋

こちら『ランドリー新聞』編集部

アンドリュー・クレメンツ 講談社

多摩川にすてられたミーコ

なりゆきわかこ KADOKAWA

千と千尋の神隠し

宮崎駿 徳間書店

ビックリ!!世界の小学生

柳沢有紀夫 KADOKAWA

あの日起きたこと

山室有紀子 KADOKAWA

若草物語(10歳までに読みたい世界名作5)

ルイザ・メイ・オルコット 学研教育出版

作り直し屋 十年屋と魔法街の住人たち

廣嶋玲子 静山社

世界からボクが消えたなら

涌井学 小学館

☆小学校六年

鬼遊び	廣嶋玲子	小峰書店
5番レーン	ウン・ソホル	鈴木出版
十五少年漂流記	ジュール・ベルヌ	集英社
中村哲物語	松島恵利子	汐文社
電池が切れるまで	宮本雅史	KADOKAWA
日本の歴史9	山本博文	KADOKAWA
天と地を測った男	岡崎ひでたか	くもん出版
注文の多い料理店	宮沢賢治	ポプラ社
イクバルの闘い	世界一勇氣のある少年	フランチェスコ・ダダモ
キャプテン	ちばあきお	学研プラス
変な家	雨穴	飛鳥新社
魔女の旅々	白石定規	S Bクリエイティブ
ふたりのえびす	高森美由紀	フレールベル館
もうひとつのヒロシマ	仲里三津治	講談社
ディズニーそうじの神様が教えてくれたこと	鎌田洋	S Bクリエイティブ
いのちをいただく	内田美智子	西日本新聞社

☆中学校一年

今夜、世界からこの恋が消えても	一条岬	KADOKAWA
永遠の0	赤川次郎	新潮社
吾輩も猫である	百田尚樹	講談社
D坂の殺人事件	江戸川乱歩	KADOKAWA
厨病激発ボーイ	藤並みなと	KADOKAWA
ハリネズミの願い	トーン・テレヘン	新潮社
5分後に犯人に迫るラスト	エプリスタ／編	河出書房新社
シエーマ	三月みどり	KADOKAWA
か「く」「し」「ご」と「住野よる	梨木香登	新潮社
西の魔女が死んだ	香西豊子／監修	いろは出版
ぼくらの感染症サバイバル	近藤史恵	東京創元社
マカロンはマカロン	満月珈琲店の星詠み3	ライオンズゲートの奇跡
変な家	望月麻衣	文藝春秋
かがみの孤城	雨穴	飛鳥新社
僕が僕をやめる日	辻村深月	ポプラ社
走れメロス	松村涼哉	KADOKAWA
MINICRAFT	大宰治	新潮社
こわれた世界	トレイシー・バティースト	竹書房

あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。

汐見夏衛 スターツ出版

僕がきみと出会って恋をする確率 吉月生 KADOKAWA

おせっかいな神々 星新一 新潮社

そして、バトンは渡された 瀨尾まいこ 文藝春秋

坊っちゃん 夏目漱石 ポプラ社

方舟 夕木春央 講談社

あと少し、もう少し 瀨尾まいこ 新潮社

君はきつとまだ知らない 汐見夏衛 スターツ出版

あの子の秘密 村上雅郁 フレーベル館

人間失格 太宰治 角川書店・新潮社

5分後に思わず涙。世界が赤らむ、その瞬間に

桃戸ハル／編著 学研プラス

青の数字1 王城夕紀 新潮社

ツナグ 辻村深月 新潮社

ツナグ 想い人の心得 辻村深月 新潮社

君たちはどう生きるか 吉野源三郎 マガジンハウス

スクラッチ 歌代朔 あかね書房

人がつくった川・荒川 長谷川敦 旬報社

アルジャーノンに花束を ダニエル・キイス 早川書房

黒い雨 井伏鱒二 新潮社

きよしこ 重松清 新潮社

給食アンサンブル 如月かずさ 光村図書出版

僕は上手にしゃべれない

空の飛びかた

セバステイアン・メッシエンモザー 光村教育図書

昆虫の惑星／虫たちは今日も地球を回す

アンヌ・スヴェルトルップリティーゲソン 辰巳出版

夢を跳ぶ パラリンピック・アスリートの挑戦

佐藤真海 岩波書店

風が強く吹いている 三浦しをん 新潮社

数の悪魔 エンツェンスベルガー 晶文社

きみの友たち 重松清 新潮社

消えた自転車は知っている 藤本ひとみ 講談社

☆中学校二年

〔書名〕

〔著者名〕

〔発行所〕

岡本太郎の眼 岡本太郎 KADOKAWA

うまくいつている人の考え方 ジェリー・ミンチントン デイスカヴァートウエンティワン

仮面の告白 三島由紀夫 新潮社

アルジャーノンに花束を ダニエル・キイス 早川書房

生きる Shoko 高橋尚子 評言社

きつと明日はいい日になる 田口久人 PHP 研究所

あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。

汐見夏衛 スターツ出版

ぬいぐるみを檻に入れられて

ジェニングス・マイケル・バーチ 暮しの手帖社

星を掬う

町田そのこ 中央公論新社

教室に並んだ背表紙

相沢沙呼 集英社

みんな虫を殺したかった

木爾チレン 二見書房

ありあまるファンタジーを Nakamu KADOKAWA

昆虫の惑星 虫たちは今日も地球を回す

アンヌ・スヴェルトルップティージェソン 辰巳出版

戦争というもの

半藤一利 PHP研究所

だから僕は大人になれない

べいんと KADOKAWA 集英社

桐島 部活やめるってよ

朝井リョウ 理論社

この川のむこうに君がいる

濱野京子 理論社

あの夏が飽和する。

カンザキイオリ 河出書房新社

嫌われる勇氣

岸見一郎 古賀史健 ダイヤモンド社

武士道シックスティーン

菅田哲也 文藝春秋

かがみの孤城

辻村深月 ポプラ社

君の臍臓をたべたい

住野よる 双葉社

カラフル

森絵都 理論社・文藝春秋

西の魔女が死んだ

梨木香歩 新潮社

一瞬を生きたる君を、僕は永遠に忘れない。

冬野夜空 スターツ出版

×ゲーム

山田悠介 幻冬舎

ガラスのうさぎ

高木敏子 金の星社

成瀬は天下を取りに行く

宮島未奈 新潮社

赤ずきん、ピノキオ拾って死体と出会う。

青柳碧人 双葉社

ないものねだりの君に光の花束を 汐見夏衛 KADOKAWA

空白小説 氏田雄介 小狐裕介 水谷健吾 ワニブックス

卵の緒 瀬尾まいこ 新潮社

仮面ライダージオウ 下山健人 石ノ森章太郎 講談社

盲導犬クイールの一生 石黒謙吾 文藝春秋

走れ！T校バスケット部 松崎洋 幻冬舎

銀河鉄道の夜 宮沢賢治 学研プラス

青春ゲシユタルト崩壊 丸井とまと スターツ出版

か「く」「し」「ご」「と」「 住野よる 新潮社

ナナメの夕暮れ 若林正恭 文藝春秋

天才はあきらめた 山里亮太 朝日新聞出版

夢をかえるゾウ 水野敬也 文響社

ものの見方検定 ひすいこたろう 祥伝社

今夜、世界からこの恋が消えても 一条岬 KADOKAWA

赤毛のアン L. M. モンゴメリ 講談社・新潮社

ああ無情 ビクトル・ユゴー ポプラ社

レ・ミゼラブル ヴィクトル・ユゴー 岩波書店・角川書店

弟の戦争 ロバート・ウエストロル 徳間書店

ツナグ 辻村深月 新潮社

スクラッチ 歌代朔 あかね書房

むかし僕が死んだ家 東野圭吾 講談社
変身 フランツ・カフカ 新潮社

南極ではたらく 渡貫淳子 平凡社・KADOKAWA
博物館へ行こう 木下史青 岩波書店

バツタを倒しにアフリカへ 前野ウルド浩太郎 光文社
人間失格 太宰治 新潮社

翻訳できない世界のことは エラ・フランシス・サンダース 創元社
カレーライスを一から作る 前田亜紀 ポプラ社

☆中学校三年

〔書名〕

くまクマ熊ベアー 〔著者名〕 くまなの 主婦と生活社

レントル・チルドレン 山田悠介 幻冬舎

線は、僕を描く 砥上裕將 講談社

天衣無縫 織田作之助 KADOKAWA

こぼこぼ、珈琲 湊かなえ 星野博美 河出書房新社

夜と霧 ヴィクトール・E. フランクル みすず書房

ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー

ブレイデイみかこ 新潮社

凍りのくじら 辻村深月 講談社

キーウの遠い空 戦争の中のウクライナ人

オリガ・ホメンコ 中央公論新社

アーモンド ソン・ウオンピョン 祥伝社

カラフル 森絵都 理論社

告白 湊かなえ 双葉社

ラーゲリより愛を込めて 辺見じゅん 文藝春秋

同志少女よ、敵を撃て 逢坂冬馬 早川書房

ライオンのおやつ 小川糸 ポプラ社

エンジェルエンジェルエンジェル エンジェル 梨木香歩 新潮社

老人と海 ヘミングウェイ 新潮社

D坂の殺人事件 江戸川乱歩 KADOKAWA

少年と犬 馳星周 文藝春秋

ナミヤ雑貨店の奇蹟 東野圭吾 KADOKAWA

僕らは『読み』を間違える 水鏡月聖 KADOKAWA

ある晴れた夏の朝 小手鞠るい 偕成社

あの花が咲く丘で、君とまた出会えたら。

汐見夏衛 スターツ出版

青春ゲシュタルト崩壊 丸井とまと スターツ出版

さよなら嘘つき人魚姫 汐見夏衛 一迅社

機動戦士ガンダム ククルス・ドアンの島

竹内清人 KADOKAWA

よるのげけもの 住野よる 双葉社

15歳のテロリスト 松村涼哉 KADOKAWA

13歳から分かる！7つの習慣

「7つの習慣」編集部／監修 日本図書センター

○読書感想文コンクール応募学校と応募作品点数の推移

	小学生の部		中学生の部			小学生の部		中学生の部	
	応募校数	応募作品数	応募校数	応募作品数		応募校数	応募作品数	応募校数	応募作品数
第1回	18	230	4	38	28	16	73	6	61
2	22	265	5	40	29	14	86	8	65
3	22	211	7	51	30	16	66	7	78
4	17	222	9	75	31	17	67	7	78
5	23	250	10	74	32	14	63	7	66
6	19	233	8	64	33	16	94	6	60
7	17	197	11	108	34	17	97	8	67
8	16	199	8	87	35	18	92	8	71
9	16	143	7	60	36	17	91	7	54
10	13	79	9	115	37	19	87	7	56
11	18	109	8	97	38	17	74	7	58
12	13	83	6	109	39	19	99	9	70
13	12	80	7	121	40	19	116	6	54
14	15	77	9	95	41	15	106	7	61
15	16	133	9	139	42	17	91	6	88
16	13	125	8	101	43	15	84	10	83
17	17	104	8	114	44	20	139	9	99
18	17	107	8	113	45	17	107	7	95
19	24	132	10	121	46	19	143	11	145
20	20	114	9	116	47	20	145	11	167
21	21	121	9	151	48	18	189	9	114
22	17	69	10	132	49	21	196	8	172
23	15	80	11	125	50	21	174	8	78
24	15	107	10	121	51	16	145	10	167
25	19	137	8	91	52	18	129	12	172
26	17	143	10	70	53	16	114	11	152
27	16	97	12	82	54	15	87	9	174

○2023年度 第54回読書感想文コンクール応募作品数

	部門別	応募作品数		部門別	応募作品数
小学生	3年	30 (13)	中学生	1年	61 (40)
	4年	22 (41)		2年	68 (57)
	5年	16 (30)		3年	45 (55)
	6年	19 (30)			
合計		87 (114)	合計		174 (152)

※()内は前年・第53回応募作品数

令和5年度 第54回

弘前市小・中学生読書感想文コンクール応募要項

一、趣 旨 本市における読書普及活動の一環として、市内の小・中学校を対象に行うもので、読書に対する関心を高めるとともに、鑑賞力と作文力向上のための一助とします。

二、主 催 弘前市教育委員会 主管 弘前市立弘前図書館（指定管理者）株式会社東奥日報社／東奥日報文化財団／株式会社陸奥新報社／アップルウェーブ株式会社／弘前ベンチクラブ（順不同）

三、後 援 弘前市教育委員会 主管 弘前市立弘前図書館（指定管理者）株式会社東奥日報社／東奥日報文化財団／株式会社陸奥新報社／アップルウェーブ株式会社／弘前ベンチクラブ（順不同）

四、応募要項

- (1) 対象者 弘前市内の小中学校3年生以上の児童及び中学校生徒とします。対象作品 感想文の対象とする作品は、文学作品と限らず書籍として発行されているもの。ただし、教科書等に掲載されている作品と漫画、コミック、写真集、画集、図鑑、地図等は対象外とします。
- (2) 応募方法 応募原稿は、各校でとりまとのうえ出品するものとします。弘前市立弘前図書館 弘前市大字下白銀町2番地1 電話321-3794
- (3) 応募先 弘前市立弘前図書館 弘前市大字下白銀町2番地1 電話321-3794
- (4) 締め切り 令和5年9月8日（金）

五、応募原稿

- (1) 用 紙 B4判400字詰め縦書き原稿用紙とします。
- (2) 筆記用具 原則として鉛筆（BまたはHB）・ボールペン（黒）とします。
- (3) 枚 数 小学校……………原稿用紙2〜3枚以内
中学校……………原稿用紙4〜5枚以内
（ただし1300字以上とする）
- (4) 題名等 応募原稿の頭書には、感想文の「題名」と「学校名」・「学年」・「氏名」だけを記載し、他事は記載しないこととします。以上は、3行以内に取り、4行目から本文に入るものとします。
- (5) 使用漢字 ①小学校は学年の教育課程に応じたものを用い、学年を超える漢字はかりがなを付けてください。また、人名や地名を除き常用漢字表以外の漢字を使用しないでください。
②中学校は常用漢字表以外の漢字はかりがなを付けてください。
③対象作品の引用は、カッコ書きでそのまま原稿に記入してください。

④入選作品集「文集はと笛2023」の刊行においては、読みやすいようにするため、使用漢字を改変させていただきます。ご了承ください。

(6) 応募 票 応募原稿には次の事項を記載した応募票を貼付してください。
① 感想文の題名 ② 所属学校名 ③ 学年 ④ 氏名
⑤ 感想文の対象となった作品に関する書誌的な事項

(7) その他 応募原稿は本人の手書きとし、他のコンクールと重複して応募していないものとします。

※以上の事項を満たしていない作品や、盗作・不適切な引用等があった場合は審査から除外することもあります。

六、審 査 応募した作品は、次の7部門に区分し、各部門ごとに第一席、第二席、第三席を各一編 佳作及び努力賞を各数編決定します。

小学校…三学年の部、四学年の部、五学年の部、六学年の部
中学校…一学年の部、二学年の部、三学年の部

七、審査委員（順不同・敬称略）

- 榊引 洋一 弘前市立郷土文学館 企画研究専門員
- 佐藤 信孝 弘前市国語教育研究会（高杉小）
- 地主 尚子 弘前市国語教育研究会（福村小）
- 三浦 隆史 弘前地区小学校学校図書館教育研究会（船沢小）
- 築館 潤子 弘前地区小学校学校図書館教育研究会（石川小）
- 鈴木 敏浩 弘前地区中学校教育研究会国語部会（五中）
- 奈良 篤志 弘前地区中学校教育研究会国語部会（四中）
- 佐藤 史子 弘前地区中学校教育研究会国語部会（東中）

八、入選発表 コンクルの審査結果は、各学校へ通知するほか、東奥日報及び陸奥新報紙上、弘前市ホームページで発表します。また、11月25日（土）に弘前市立弘前図書館において表彰式を開催し、入選者に賞状及び商品を贈ります。

九、入選作品集「文集はと笛2023」

- (1) 第一席・第二席・第三席及び佳作に入選した作品は、「文集はと笛2023」に収録し、小・中学校、県内公立図書館などに配布します。
- (2) 「文集はと笛2023」に収録した作品は、弘前市ホームページにも掲載し、利用者に広くご覧いただくこととします。
- (3) 「文集はと笛2023」に収録した作品の著作権は主催者に帰属します。ただし、本人及び在籍校の利用は妨げません。

十、その他

- (1) 応募原稿は「文集はと笛2023」の配布と同時に返却いたします。
- (2) お問い合わせ先 弘前市立弘前図書館 電話321-3794

編集後記

▼令和五年度第五十四回弘前市小・中学生読書感想文コンクールには、市内小・中学校二十四校より総数二百六十一一点の作品が寄せられました。

ご応募いただいた児童・生徒の皆さんに心から感謝申し上げます。また、ご指導や協力をいただきました各学校の先生方、さらにはお忙しい中にも関わらず審査に当たっていただきました先生方にお礼申し上げます。

さて、近年における小・中学生の読書の状況はどのように変化してきたのでしょうか。全国学校図書館協議会の全国調査によると、二〇二三年五月一カ月における読書冊数は、小学生が二・六冊、中学生は五・五冊で、三十年前（一九九三年）の小学生六・四冊、中学生一・七冊と比べてはるかに多い冊数となっています。この間は、年々少しずつではありますが読書冊数は増加傾向となっています。きちんとした分析結果ではありませんが、学校における「朝読」活動ですとか、電子図書館の普及なども冊数増に影響しているのかもしれない。

読書は、子どもたちが言葉を学び、感

性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力に身につけていくうえで欠くことのできないものです。

子どもたちの健やかな成長を願うとともに、さらなる読書の普及を願ってやみません。
(重灌雅信)

▼読書感想文コンクールの担当になり、今年で三年目になります。毎年たくさん応募がありますが、今年は中学生の部では百七十四点と歴代一位の応募数となりました。応募いただきました児童・生徒の皆さん、ありがとうございます。

皆さんの感想文を読ませていただきましたが、本を探しに図書館へ来て、書かれていた内容に興味を持ち、そこからさらに色々調べたり、すごく難しい本にチャレンジしたり、自分自身が抱えるコンプレックスと向き合ったり、命の大切さや思いやりに気付いたり、他にもたくさんさんのことを本から学び、自分自身も一度見つめ直そうという素直な気持ち溢れていました。作品を読ませていただくたびに、私も皆さんからたくさんのごことを学ばせていただいております。

さて、弘前市では昨年の七月から市立小中学校で電子図書館が利用できるようになり、タブレットで読書をする機会も

増え、読書の楽しさに目覚めた方もいるのではないのでしょうか。

読書の機会が増えたことはとても喜ばしく思いますと共に、まだ図書館に来たことがない方もこれを機にぜひ図書館へも足を運び、たくさんの本を読んでいたけると図書館スタッフとしては嬉しい限りです。今現在、電子図書館では約三百冊の本を読むことができますが、弘前図書館では約五十万冊の本を所蔵しております。この五十万冊の中に、皆さんの興味をかきたてるような本がきっとあるはずですよ。たくさん素敵な本と出会えるよう、お手伝いさせていただきますので、図書館にもぜひお越しください。

最後になりますが、指導に当たられた先生方、そしてお忙しいなか、審査をお引き受けいただきました先生方に感謝を申し上げます。
(猪股邦子)

装丁

装画 三上理沙

文集はと笛 2023

令和六年一月十八日 印刷

令和六年一月二十五日 発行

編集 弘前市立弘前図書館

弘前市大字下白銀町二一一

発行 弘前市立弘前図書館